

弘前藩の刑法典（十二）——寛政律——

付 『要記秘鑑』三十四 （二・完）

橋 本 久

目 次

はじめに

一 安永律

付1 『御刑罰御定』（安永律）

〔第六号〕

〔第十三号〕

付6 『要記秘鑑』三十三 安永四年八月二十六日条

〔第二十号〕

二 寛政律

(一) 『御刑法書之写』

〔第七号〕

(二) 『寛政律』（その一）

〔第八号〕

(三) 『寛政律』（その二）

〔第十一号〕

(四) 『寛政律』（その三）

付2 『隠商過料定牒』

付3 『人別方御用取扱条例』『人別調方取扱条例』

〔第十三号〕

(五) 『寛政律』（その四）

補訂1 『藩法史料集成』所収「弘前藩御刑法牒」

〔第十四号〕

(六) 『寛政律』（その五）

付4 『諸取引御触書』『公義御書付留』『公義御触書留』

付5 (参考) 『公事訴訟取捌』

(七) 『寛政律』（その六）

〔第十七号〕

(八) 『寛政改正御刑法帳』

〔第十九号〕

(九) 『寛政改正 刑律』

〔第二十号〕

付6 『要記秘鑑』三十三

〔第十七・十九・二十号〕

料 (十) 『寛政九年 刑法』

(十一) 『法律秘略』

付7 『要記秘鑑』三十四

資 (十二) 以下

三 文化律

〔第二十一号〕

〔本 号〕

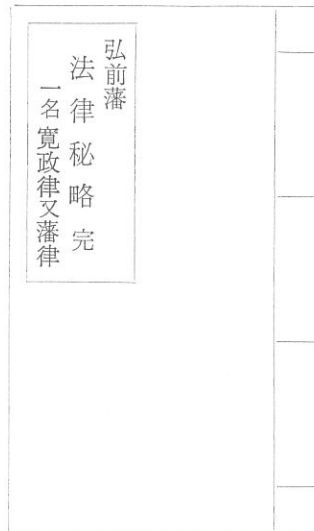
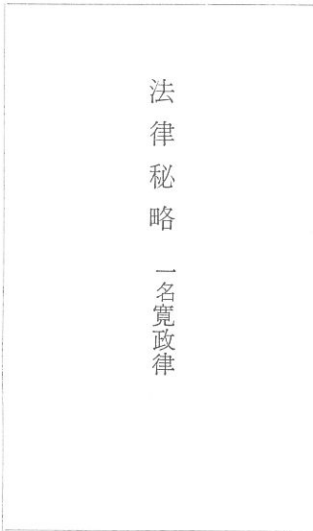
〔第二十一・本号〕

二 寛 政 律

(十一) 『法律秘略』

凡 例

- 一 原本は弘前市立弘前図書館所蔵本 (K三三二・五一六一) を用いた。
- 一 字体・字配りは、できるかぎり原本にしたがった。異体字・変体仮名については、かならずしも原本通りではない。
- 一 原本の塗抹は元字の左にゝを付し、右に訂正した文字を記した。
- 一 原本の行末が次行に及んだ場合は、行末を示すために「をくわえた。
- 一 原本には見られないが、各項目の前に適宜行間を空けた。
- 一 原本の丁数・表裏を各終行末に「」で示した。
- 一 便宜上、(二)〜(十)に倣い、各項目に一、二、三、……、各条文に仮番号1、2、3、……等の数字を付した。ただし条文番号の18、21は省く。
- 一 他に適宜書き加えた箇所は「」で示した。



〔内表紙〕

〔表紙〕

(縦24.3cm, 横17.2cm)

此度御刑法御改被仰付ハニ付沙汰仕ハル如明律者歴代之
 刑法損益相立ハ義ニ付律之輕重宜義理共正敷御坐ル
 得共當時ニ比ビ得者一体之律重御坐ル間明律ニ而答罪ニ
 相當ハ部者大方當時戸メニ而相済ハ振合ニ御坐ル而尚又
 刑法」も違ハ間其仮難用依之當時通例ニ行ハ刑名ヲ以明
 律」之格ニ隨ヒ差等相立専ラ義理ニ寄輕重相分申ハ尤右
 之内」公義御定ニ相拘ハ義并是迄之御法ニ而俄ニ輕重難
 相成ル分」者ヲ得沙汰仕對^{〔イ、ウ〕}加減仕ハル間此末御刑罰御下
 ケ之節」若此度相立ルケ条之内洩ル義御坐ル而も右之趣
 ヲ以明律」越參考イ多し罪之輕重無之様被仰付ハ様奉存
 ハ則此度」相立ル御刑法名目と明律相當之差等如此

戸メ 明律答刑
 五日 十
 十日 二十
 十五日 三十
 二十日 四十
 三十日 五十
 鞭刑 明律杖刑
 三 六十
 六 七十

〔一ウ〕

| | | |
|---------|------------------------------|------|
| 九 | 八十 | |
| 十二 | 九十 | |
| 十五 | 一百 | |
| 鞭刑追放 | 明律徒刑 | 〔二才〕 |
| 十八 所拂 | 一年杖六十 | |
| 二十一 三里 | 一年半杖七十 | |
| 二十四 五里 | 二年杖八十 | |
| 二十七 七里 | 二年半杖九十 | |
| 三十 十里 | 三年杖一百 | |
| 大場御構 | | |
| 徒刑 | 明律流刑 | |
| 半年 鞭三十 | 二千里杖一百 | 〔二ウ〕 |
| 一年 同三十 | 二千五百里杖一百 | |
| 一年半 同三十 | 三千里杖一百 | |
| 死刑 | 明律死刑 | |
| 斬 | 絞 | |
| 獄門 | 斬 秋後 | |
| 火刑 | 火刑ハ火付ヲ極テ重科ニ相立ル 公義御定ニ付 明律相當ナシ | |
| 磔 | 斬 即決 | |

御刑法御定

定例御刑法名目

| | | |
|---|----------------------------------------------------------------------------------------------|------|
| 一 | 戸ノ五 点羽戸ノ義是マテ日限幾日ニ相成ル 間御免被 仰付ル様申上ル得共以來ハ幾日ニ而戸ノ御免被 仰付ル様ニト日數ヲ記し申上ル義辰八月相済 戸ノ五日 同十日 同十五日 同二十日 同三十日 | 〔三才〕 |
| 1 | 但子兄弟或ハ奉公人之類戸ノ難相成者ハ右之日數 之「通過料人夫或者一日六十文之積ヲ以過料錢為 差出」ル之事 | 〔三ウ〕 |
| 二 | 鞭刑五 | |
| 2 | 鞭三 同六 同九 同十二 同十五 | |
| 三 | 鞭刑追放 | |
| 3 | 鞭十八所拂 同二十一 三里 同二十四 五里 同二十七 七里 同三十 十里 大場御構 | |
| 四 | 但追放ハ鞭十八以上ニル得共其罪之子細ニ寄其 所ニ難差置分者鞭數ニ不拘所拂可致事 | |
| | 徒刑三 | 〔四才〕 |

| | | | |
|---|-------------------------------|---------|------|
| 4 | 徒半年鞭三十 同一年半鞭三十 | 同一年鞭三十 | |
| 5 | 但徒刑之者ハ銅鉛山江差遣鞭刑之上年限之通 苦使可致支 | | |
| 5 | 死刑四 斬 獄門 | 磔 火刑 | |
| 6 | 贖刑 鞭三 | 過料三貫六百文 | [四ウ] |
| | 同六 | 同 四貫二百文 | |
| | 同九 | 同 四貫八百文 | |
| | 同十二 | 同 五貫四百文 | |
| | 同十五 | 同 六貫文 | |
| | 同十八 | 同 十二貫文 | |
| | 同二十一 | 同 十五貫文 | |
| | 同二十四 | 同 十八貫文 | |
| | 同二十七 | 同 二十一貫文 | [五オ] |
| | 同三十 | 同 二十四貫文 | |
| | 徒半年 | 同 三十貫文 | |

| | | | |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|--------------------|
| 7 | 右過料之義老幼廢疾之類刑ニ不被行者并過而人越殺し 或ハ疵付ル類相當之過料ニ而罪越可贖事 | 同一年 同一年半 | 同 三十三貫文 同 三十六貫文 |
| 7 | 一過料之者若貧困ニテ上納難相成者ハ銅鉛山江差遣一日六 〔五ウ〕 十文之積ヲ以夫役ニ使ひ可申事老幼廢疾之類夫役ニも 難相成者ハ其身牢舎之上一年或ハ二年ニ而用捨可致事 | 同 四十二貫文 | |
| 7 | 五逆之事 | | |
| 8 | 一 惡逆 祖父母々并夫之祖父母々越打擲い多し或ハ殺さんと謀 并伯叔父姑兄姉母方之祖父母越殺し夫越殺ル者之事 | | |
| 9 | 一 不道 一家之内死罪ニあらざるもの越三人殺し并人之支 体越切ほときむふく切害い多し者之事 〔罰〕 | | |
| 10 | 一 大不敬 御宗廟御飾物并御名物ニ越盜取ル者之事 〔六オ〕 | | |
| 11 | 一 不孝 祖父父母母之事越訴へ或ハ惡口し父母之扱宜 可ら須難洩せしむる者之事 | | |
| 12 | 一 不義 支配之者頭分之者越殺し弟子として師匠越ふる し者之事 | | |
| 13 | 老幼廢疾之事 一年七十歳以上拾五才以下并廢疾之者死罪以下贖ニ而 用捨い多しへく事八十才以上十才以下死罪越犯ル者ハ | | |

上聞之上時宜_ニ御沙汰可被仰付_ル事盜賊_ニ人_ニ疵付_ル者贖越出させ可申事其余之罪ハ御搆無之九十才以上_{〔六七才〕}以上_{〔六ウ〕}以下_{〔七ウ〕}ハ死罪_ニ而も刑越不可加事

但罪越犯_ル節未_ク老癡_ニ無之共事頭_ル節老疾_ニ由_ル者_一老疾_ヲ以沙汰可致事幼少之節罪越犯_ル壯年_ニ至_リ事頭_ル節幼少之例_ヲ以沙汰可致事

14 一 癡疾之事惣而人_ニち_レ連_ル片輪病人越云なり馬鹿乱心之類も癡疾とい多し_{ヘク}事

九 科人ハ首徒越可相分事 _{〔七才〕}

15 一 貳人_ニ上申合犯罪之節者其内趣意越相企_ル者越首_ヲ致_ル事_一其余ハ徒_{〔徒〕}与_テ致_ル事徒_{〔徒〕}与_テ者_トハ首_ヲ罪_一等越可減事_一本文ニ同類_一不_レ淺_{〔淺〕}と有_ル之ハ首徒之差別無之_事

一〇 老人ニ而二罪有之事

16 一 九二罪_ニ已上共_ニ頭_ル節重者老ケ条越以て罪越定_ル事

若一罪先_ニ頭_ル敬既_ニ刑越加_{ヘル}後外之罪頭_ル節輕_キ者并同等之科_ハ御沙汰_ニ不及_ク若跡_ニ而頭_ル科重_ルハ、沙汰直しい多し前罪之鞭數差引_レ殘鞭數斗刑越加_{ヘル}事_{〔七ウ〕}

一一 五軒組合連坐_ニ可及_ケケ条之_事

17 一 隠田畑 一 隠津出 一 盜柚 一 博奕宿

一 隱商賣

右ケ条之内罪越犯_ル者組合_ノ者_ハ本人之罪相當_ヲ以過料_ニ直し組合四軒_ノ差出させ_ル事

但組合四軒_ニ不_レ滿者_ハ四軒割合_ヲ以不足分御用捨_之

事一

一二 科人自身申出_ル者

22 一 惣而悪事越致_ル者事頭_レさる_レ已前申出_ニ於_テハ其罪用捨被仰付_ル事 _{〔八才〕}

但人越疵付_ル或ハ物_ニ寄不可償并_テ發通之類不許_ル事

23 一 竊盜或ハ手段_ノニ而人之財物越取り其後過越悔_ル而自身与_テ本人江返_ル者_ハ上江申出_ル同前其科可許_ル事

一三 親類ハ罪越隠_ル而も御用捨_之事

24 一 父母伯叔姑夫婦之間罪者有之相隠_ル而も御咎無_之事

但其事越漏らし逃去らしむる共不可罪事家來主人之為_ニ隠_ル而も是又同前之事其外妻之父母娘之婢_{〔八ウ〕}夫之兄弟_ハ相隠_ル而も罪三等越減し_レ逼_キ事

一四 親類輕重之事

- 25 一本文ニ祖父母与有之ハ高祖曾祖同様之事孫与有之ハ曾孫
玄孫同様之事嫡孫之承祖ハ父母与同様之事嫡母養母ハ
実母ト同様之事

一五 罪可減者ハ累減越得之事

- 26 一縱令ハ罪越犯^{〔徒〕}者首与徒与有之時其徒^{〔徒〕}之者罪減之上其者
外ニ可減子細有之時^{〔徒〕}又幾重も段々減し可申事〔九才〕

〔一六 欠〕

- 27 一婦人之犯罪者鞭十五ニ可過鞭十五以上ニ相當^{〔徒〕}節十
五鞭切ニて残る數ハ過料ヲ以罪越贖せ可申事

28 一婦人之鞭刑ハ繻伴之上ヲ打可申事

但姦通之罪^{〔徒〕}衣越去り直ニ打へき事竊盜之類ハ
入墨可致事

一七 不義之財物取捌之事

- 29 一財物之上ニ而罪越犯^{〔徒〕}者本人相手共ニ罪有之時分其財物
ハ役収可致事若相手方罪有之本人罪無時其財物者
主人江返^{〔九ウ〕}事

30 一其財物之役収可致物既ニ費し用^{〔徒〕}ハ、償可為出^{〔徒〕}事
若科人身死^{〔徒〕}而品物費物之節ハ取立ニ不及^{〔徒〕}事

一八 同類之内出奔有之片口ニ相成^{〔徒〕}者之事

- 31 一同類之内老人ハ出奔致^{〔徒〕}老人ハ召捕^{〔徒〕}節其者出奔致^{〔徒〕}者
越本人之旨申出別ニ證人無之者徒^{〔徒〕}与なし刑越加

へ可申事其後出奔致^{〔徒〕}者召捕^{〔徒〕}札明致^{〔徒〕}節取初^{〔徒〕}之者本人
相違無之節ハ則首与い多し殘刑越可加事 〔一〇才〕

一九 罪科加減之例

- 32 一加ト云ハ本罪之上ニ猶加へて重^{〔徒〕}くする事減ト云ハ本罪之
上ニ猶減して輕^{〔徒〕}く致^{〔徒〕}事但減^{〔徒〕}節ハ四段之死罪三段之
徒各「一等トい多し減^{〔徒〕}事鞭刑ニ至而ハ三鞭ツ、一等越
減可申事」加^{〔徒〕}節ハ一段毎^{〔徒〕}ニ一等と致^{〔徒〕}事尚又加罪ハ徒
一年半鞭「三十限ニ而加へて死^{〔徒〕}ニ不可入加へて死^{〔徒〕}ニ不可
入ものハ其ケ条」江其訳断有之事

二〇 闕所之事 〔一〇ウ〕

- 33 一欠所之事鞭三十已上專利欲^{〔徒〕}ニ拘^{〔徒〕}科ハ其利欲之輕重ニ
寄田畑或ハ家屋敷家財^{〔徒〕}ハ欠所可申付事重罪^{〔徒〕}ても利欲

料 不抱者ハ律之ケ条ニ出ル外ハ欠所不可致ル事

二一 取押物之事

資 一 惣而禁越犯ル物越取押ル義其懸合役筋之者ニ無之ル得者

其品取押ル者ニ被下ル事其役筋ニ而取押ル得者押物多
少ニ寄御賞被下其品物ハ役取可致事

人命 人越謀而殺ル者 (一一才)

二二 一宿意ヲ以て謀て人越殺ル者ハ其張本人ハ獄門荷擔手傳

致殺ル者ハ斬罪荷擔斗ニ而手傳不致ル者ハ徒一年半

致殺ル者ハ斬罪荷擔斗ニ而手傳不致ル者ハ徒一年半

一 疵付ル斗ニ而不死時ハ張本人ハ斬罪荷擔手傳致ル者ハ徒

一年「半鞭三十

一 謀殺之事行ルハ疵付不申ル得共張本人ハ鞭三十加談手

傳ル者ハ鞭十五 (一一ウ)

右之張本人ハ縱令其場ニ不臨ル共殺ル節其身手ニ懸殺ル

同然疵付ル節ハ手ニカサ疵付ル同前之事加談之者ハ其場
ニ不臨ル得者其場ニ相臨ル者ハ罪ニ等越許可申事

一 若是ニ依て財宝越取ルハ強盜之律ニ隨ヒ張本人加談之

「差」別無之不殘礎但同行之内ニ而も財宝越分不申ルヘ者
謀殺」之律ニ依て捌ル事

二三 謀て親越殺ル者

一 謀て親越殺ル者男女ニ不限肆物鋸引婦人夫之父母越

殺も同然 (一一二才)

鋸引之者ハ罪之次第建札致往來道路ニ肆ル事

三日往來之者勝手次第鋸引致せ右日限相濟ル迄

鋸引致ル者無之節ハ引廻之上磔

一 殺逆之事既ニ行ル得者臂疵付不申共磔

一 親殺之者妻子不殘遠追放家屋敷家財欠所

但子ニても別居之者ハ御用捨之事

一 親殺之者於自滅ハ死骸塩漬之上磔可致事 (一一二ウ)

二四 親族之謀殺

一 祖父母越殺さんと謀リ既ニ行ル得者獄門殺ル得者磔但母

方」之祖父母同様之事

一 婦人夫之祖父母夫越殺も右同様之事

一 伯叔父姑兄姉ハ謀殺既ニ行ルヘ者徒一年鞭三十疵付

ル得者獄門殺ル得者磔

47 一 祖父母父母子孫越謀殺致_レ者不及解死人徒一年半鞭三

十限ニ而加へて死_レ不可入加へて死_レ可入物ハ其ケ条其
断_レ有_レ之事

48 一 伯叔父姑之甥姪越謀殺致_レ兄弟之弟妹越謀殺之者斬罪

二五 謀て主人越殺_レ者

49 一 謀て主人越殺_レ者男女ニ不限肆し者鋸引但疵付_レ者行_レ

者_レ凡_レ而子之父母_レ對_レし_レ同然

50 一 下人他之主人越殺_レ者磔但下人主人_レ暇出外へ奉公致罷

有_レ本之主人越殺_レ者ハ他の主人越殺_レと同様之事

二六 姦_レ因て夫越殺_レ者 (一三ウ)

51 一 妻妾他之人と姦通致因て夫越殺_レ者引廻之上磔姦夫ハ獄

門若男之手段而已ニ而女其謀越知_レら須といへとも女ハ斬

罪又_レ女之手段而已ニ而男其謀越不知時_レ只姦夫之刑_レ

一等越加へ_レル_レ而罪_レ行_レ事

52 一 妻妾人_レ姦通致_レ越現在姦通之処_レ於_レ而見届即時ニ

殺_レ者ハ御咎無_レ之事若其場越立去_レり_レ後訴も無_レ之_レ

し_レい_レま_レず_レ不殺_レ者ハ喧嘩_レまて人越殺_レと同様之事

二七 一家三人越殺_レ者 (一四オ)

53 一 一家之内死罪_レあらざる者三人越殺_レ并人の支体越切_レほと

幾_レむ_レむ_レく殺害致_レ者引廻之上磔家財欠所死去_レ者へヒ

下_レ事_レ妻子ハ遠追放加談手傳致_レ者ハ獄門但追放之義

別居之_レ子ハ御用捨之事

二八 頭分之者謀殺致_レ者

54 一 支配之者頭分之者越殺_レさんと謀既_レ行_レ得者徒半年鞭

三十疵付_レへハ斬罪殺_レ者ハ磔

二九 咒詛毒薬 (一四ウ)

55 一 咒詛調伏_レ越以て人越殺_レさんと謀る者ハ謀殺之律越以て

罪_レ行_レ事若人越苦しめんと謀_レり_レ得者二等越滅_レ事

毒薬_レ用_レる_レ与_レ同様之事毒薬越買未用者鞭三十其事越知

て_レ薬越賣者同罪不知時_レ御咎無_レ之

三〇 打擲_レ而人越殺_レ者

56 一 本_レ巧て殺_レ心_レ無_レ之一時之喧嘩打擲_レて人越殺_レ者ハ

斬罪_レ尤相手理不_レ尽_レ之致方_レにて不得止事_レ於_レ切害_レハ相手方

親族名_レ主詮議之上被殺_レ者平日不法者_レ相違無_レ之_レハ

〔一五オ〕
、死罪」二等越減し可申事

57 一同謀て人越打擲い多し依之死に至り得者急處之疵越得せ

ゆ者越解死人ヲ可致事但辰初事越企ゆ者ハ徒一年

半鞭三十余人ハ何連も鞭十五

三二 怪我にて人越殺ゆ者

58 一怪我にて人越殺し或ハ疵付ゆ者打擲之律ニ依て贖越取り

其者へ被下ゆ事

59 一途中馬車ニ而人越阿やまらゆ者緩怠之事無之ゆハ、怪我

ヲ以て沙汰可致事

60 一危き業越い多し因て人越殺ゆ者贖ヨ難相成打擲之律

越以て刑越可加事

61 一喧嘩にて傍之人越殺し疵付ゆ者喧嘩マて人越疵付ゆと

可為同然事

62 一若又謀て人越殺さんとして過而別人越疵付ゆ者謀殺ヲ

以て沙汰可致事

三二 夫有罪之妻妾越殺ゆ者 〔一六オ〕

63 一妻妾夫之祖父母父母越打擲ホニ寄其夫打依て死ニ至リゆ

共御搆無之若又強而ほしまニ殺ゆ得者鞭十五

但外之罪ニ寄打殺ハ可為解死人事

64 一夫妻妾越打擲或ハ罵ホ致ニ寄其妻妾自殺之者ハ不及沙汰

事

但重き疵負ゆ節ハ夫妻妾越打擲ル律ニ依て沙汰可致

事

三三 人越逼て死越い多し者 〔一七オ〕

65 一事ニ依て人越逼り其人自殺致ゆ者鞭十五并金二兩越出さ

しレめ死者之家ニ被下ゆ事若姦越行盜越致ゆ為人越逼り

死レ越致サセゆ者ハ獄門

三四 人殺ゆ者内済ヲい多しゆ者

66 一祖父母父母人之為ニ殺され其子孫内済致ゆ者徒一年半

鞭三十夫越殺ゆ而内済い多しゆ者同然伯叔父姑兄姉ハ

二等越減し可申事若子孫人之為ニ被殺祖父母父母内済

い多しゆ者鞭九常人之内済ハ鞭三

67 一内済之為賄賂越取ゆ者ハ錢之高ヲ以て竊盜ニ準し重

き方ニ而沙汰可致事但父母殺され賄越取ゆ者死罪

68 一同居或ハ同行之人初ル其人越得て害セんとスる事 〔一七オ〕

存ナ可ラ留サる者并被殺ゆ後訴スる者鞭十五

打擲

三五

喧嘩打擲へ疵之輕重ヲ以罪ヲ定る事

69

一手足或へ外之物越て人越打擲致ゆ者戸メ十五日疵付ゆ得者戸メ二十日

但打ゆ処不破共青赤ニ腫れゆ越疵と定る事

70

一血鼻口之内与り出或へ内損血越吐ゆ者鞭九不浄之者ヲ以人^{〔一七ウ〕}之頭面越汚ゆ者右同様

71

一齒一枚或へ手足之指本越折一目越傷并耳鼻越傷ゆ者鞭十五湯火越以人を傷ゆ者不浄越以て人之口鼻江入ゆ^{〔折〕}

72

一茂同様之事齒二枚指二本以上越打ゆ者鞭十八

73

一人之骨越折并兩目越傷メ或へ婦人之胎越墮し并一切之刃物之切疵者鞭二十四但兵器ニ而も柄越以打ゆ得ハ刃物ニ^{〔折〕}

74

一手本越打一目越潰ゆ者鞭三十^{〔折〕}

75

一兩手越折或へ兩目越潰し或へ持病^{〔折〕}有之処ニ因て廢疾ニ至ら^{〔折〕}しむる者并人之陰陽越傷 疵ヲ得ゆ者江^{〔折〕}下^{〔折〕}の事 右条之科人大勢ニ而犯ゆ節其内疵付ゆ者越重科ニ致ゆ事 本越意企ゆ者ハ疵付不申ゆ而も其次之科ニ申付ゆ事但疵越^{〔折〕}得ゆ者若死ニ至りゆ得者同行之内 人越殺ゆ節不留^{〔折〕}之律ニ而^{〔折〕}鞭十五

76

一喧嘩ニ而双方疵越得ゆ節双方相改疵之輕重ニ而罪越定る事 尤跡^{〔折〕}手越下し理直きハ二等越減し可申事 〔一八ウ〕

三六

疵療治之事

77

一疵越蒙ゆ日限越立打擲之者^{〔折〕}療治越為致しむ逼き事 日限之内死ゆ得者打擲之者可為解死人事若日限内ニ而も疵^{〔折〕}平愈致ゆ断差出ゆ後余病ニ而死ゆ得者只打擲之罪越可加事

78

一指本越打ゆ以上之疵日限之内療治ニ而平愈致ゆ得者罪^{〔折〕}ニ等越可減日限滿る日迄療治無之者ハ右之本律を相用得ゆ^{〔折〕}事尤婦人之破産并病氣平愈ニ而も廢疾ニ至ゆ得者罪減申^{〔折〕}間敷事 〔一九オ〕

79

一手足之外金瘡火毒^{〔折〕}ヲ三十日限手足越打骨痛ゆ婦人の墮胎ハ五十日

三七

勢越以て人越轉^{〔折〕}り打擲致ゆ者

80

一争論ニ依て人越轉^{〔折〕}り打擲致し或へ於私宅人越押箠ホ致ゆ者鞭九若疵重く内損吐血以上ニ至りゆ得者平人打擲^{〔折〕}ニ等越^{〔折〕}加へ可申事尤自分手越下し不申共差圖致ゆ者ハ本罪^{〔折〕}可致^{〔折〕}事差圖越受手越下ゆ者^{〔折〕}一等越減可申事

下人主人越打擲い多し者

〔一九ウ〕

81

一人人として主人越打擲い多し者獄門死^{〔儀〕}に至りし得者鋸引怪我」よて殺し得者斬罪怪我ニ而疵付し得者徒一年半鞭

三十」

82

一人人下人越打擲致し者軽き疵ハ御沙汰ニ不及事打傷以上之疵」ハ平人打擲る四等越減可申事死^{〔儀〕}に至し得者鞭十八怪我ニ而殺」し得者不及御沙汰事

三九

妻妾夫越打擲致し者

83

一妻妾夫越打擲い多し者鞭十五打傷以上之疵ハ平人打擲る三等越可加事一目越潰以上ハ斬罪死^{〔儀〕}に至しハハ磔

84

一若妻夫并妻越打擲致しハ又一等越可加事死^{〔儀〕}に至りハハ磔^{〔二〇オ〕}尤^{〔二〇オ〕}加ふるものハ加へて死^{〔儀〕}入る事

85

一夫妻越打擲い多し者打傷以上^{〔儀〕}にあらざれハ御沙汰ニ不及事」右已上ハ平人律ニ等越可減事死^{〔儀〕}に至しハハ斬

86

罪妾越打擲致」打傷已上^{〔儀〕}に至しハハ又一等越減可申事死^{〔儀〕}に至りしハハ鞭三十妻之」妾越打擲い多しハハ夫之妻越打擲致しと同様之事怪我ニ而」殺しハハ其證據分明ニ於てハ不及御沙汰事

四〇

兄弟之打擲

〔二〇ウ〕

87

一弟并妹として兄弟越打擲致し者鞭二十七疵付しハハ鞭三十」打傷しハハ徒一年半刃傷ニ及手足越打^{〔折〕}一目越潰以上ハ斬罪」死^{〔儀〕}に至しハハ獄門伯叔父姑越打擲致し者同様之事怪我ニ而殺と」或ハ疵付し者本殺傷之罪ニ等越減し可申事尤贖ハ難相成事」

88

一兄弟之身として弟妹越打擲ニ而殺し伯叔父姑之甥姪越打擲ニ而殺し者鞭三十怪我ニ而殺しハハ證據分明ニ於てハ御沙」汰ニ不及事

89

一子孫として祖父母ハ越打擲致し并妻として舅姑越打擲い多し者獄門死^{〔儀〕}に至りしハハ鋸引怪我ニ而殺し者ハ斬罪」

90

一祖父母ハ子孫越打擲ニ而殺し者鞭十五繼母ハ一等越加ハ可申事」但子孫祖父母ハ越罵り或ハ打しニ寄依之打擲い多し死^{〔儀〕}に至しハハ御沙汰ニ不及怪我ニ而殺しも同様之事」

四一

師匠越打擲い多し者

91

一師匠越打擲致し者平人ニ等越加ハ可申事殺し者ハ磔

四二

父祖人ヲ被打擲其子孫返し打ゆ者

92

一 祖父母ノ人ノ為ニ被打擲其子孫救ヒ為返し打ゆ者〔二一ウ〕輕キ

疵ヲ御沙汰ニ不及打傷ハ已上ニ至リハハ平人打擲ル三
等越滅シ可申事死ニ至リハハ定法之如ク可為解死人
事

事

盜賊

四三

竊盜

93

一 盜致ル者入墨之上盜取ル高ニ應シ輕重之罪科可行事

定

一 十貫以下

入墨鞭三

一 十貫以上

同六

〔二三オ〕

一 二十貫以上

同九

一 三十貫以上

同十二

一 四十貫以上

同十五

一 五十貫以上

同十八

一 六十貫以上

同二十一

一 七十貫以上

同二十四

一 八十貫以上

同二十七

一 九十貫以上

同三十

〔二三ウ〕

一百貫以上

徒半年鞭三十

一百十貫以上

徒一年鞭三十

一百二十貫以上

徒一年半鞭三十

一百三十貫以上

斬但徒ノ者死罪一等ヲ許ル事

右錢高を以て罪之輕重越立ハ義盜取ル品幾人ニ而も分前

ニ不拘盜取ル本高越以て老人毎ニ罪越加ル事尤徒之

者ハ一等越滅可申事但一時ニ數家ニ於て盜取ル節者

其内一家之財多方ヲ以罪越定ル事米穀ハハ時之直段

越以て錢ニ直シ品物ハ直打致セ錢ニ差積可申事

94

一 盜ニ入ル者財物越取り不申ハハ鞭三入墨即許之但人の

土藏越破リ或ハ盜ニ入ル次第ニ寄大盜ニ紛無之ハ財物

ニ不拘入墨鞭三十

95

一 入墨之義腕へ廻ル幅三步程入墨可致尤初度ハ右腕ニ

目ハ左へ則三度目ニ及ルハ多少ニ不拘斬罪

四四

御城中江入盜い多しゆ者

96

一 御城中江忍入盜い多しゆ者獄門

〔二三ウ〕

但寛政十一未年四月表坊主棟方嘉林隠居之後病屈ニ

而御城へ紛入ルニ付死罪〔等〕ニ越許徒刑ニヒ仰付ル

例

料 四五

自分預物私曲い多しゆ者

97

一 御預物越私曲致盜取ゆ者首徒^{〔從〕}差別無之盜取ゆ錢高越以て

罪越定る事尤幾人ニ而も分ゆ而も分前之高ニ不拘盜取

資

ゆ本高ヲ以老人毎ニ罪越加る事

定

一 二貫五百文以下

入墨 鞭九

〔二四オ〕

一 二貫五百文以上

同十二

一 五貫文以上

同十五

一 七貫文以上

同十八

一 十貫文以上

同二十一

一 十二貫五百文以上

同二十四

一 十五貫文以上

同二十七

一 十七貫文以上

同三十

一 二十貫文以上

徒半年鞭三十

〔二四ウ〕

一 二十五貫文以上

同一年同三十

一 三十貫文以上

同一年半同三十

一 四十貫文以上

死刑ノ代徒二年鞭三十

四六

御藏之財物越盜取ゆ者

98

一 御藏之財物越盜取ゆ者并御藏廻之者共御藏之財物越

一四八

私曲い多しゆ者首徒^{〔從〕}ナリ差別盜取ゆ錢高ヲ以罪越定る事

尤幾人ニ而分ゆ而も分前之高ニ不拘盜取ゆ本高ヲ以て

老人毎ニ罪越加る事

定

一 五貫文以下

入墨 鞭六

一 五貫文以上

同九

一 十貫文以上

同十二

一 十五貫文以上

同十五

一 二十貫文以上

同十八

一 二十五貫文以上

同二十一

一 三十貫文以上

同二十四

一 三十五貫文以上

同二十七

一 四十貫文以上

同三十

一 四十五貫文以上

徒半年鞭三十

一 五十貫文以上

同一年同三十

一 五十五貫文以上

同一年半同三十

一 八十貫文以上

斬

但御藏廻之者私曲致ゆ得者死罪之代徒二年鞭三十

四七

強盜

〔二六オ〕

99 一 追剥之者既ニ行ハ得者財物越取不申共徒一年半鞭三十

財物越取ハ得者同類不殘礙

100 一 盜ニ忍入ル者其家之人江手向イ多シ或ハ疵付ル得者強盜

之御仕置タルヘクハ但同類之者助力不致ル者ハ竊盜ヲ以沙汰イ多シハ事

101 一 若竊盜已ニ財物越捨逃去ル越其家人追懸依而手向致ル者ハ此律越不用科人手向之律越以て刑越加ル事

四八 一 白昼ニ人之物越^{〔槍〕}揜奪イ多シル者 〔二六ウ〕

102 一 白昼ニ人之物越奪取ル者鞭三十若盜取ル品之高多ルハ、竊盜之罪ニ二等越可加事徒之者ハ一等越可減事

103 一 難船ホ之節便ニ乘シ乱防致ル者同類之事

104 一 喧吶イ多シ^{〔儀〕}に因テ財物越奪取ル者は又同類之事

105 一 巾着切之類^{〔槍〕}檢奪ハ無之ハ、竊盜之律越以刑越加ル事

〔四九 欠〕

106 一 盜之為ニ火を付ル者火刑^{〔燈〕}立不申ルヘハ斬罪

〔一〇七 欠〕

五〇 馬盜

108 一 馬越盜取商賣イ多シル者ハ斬罪 〔二七オ〕

五一 盜杣

109 一 盜杣取ル者杣取之多少ヲ以御藏之財物盜取ル律ヲ以て刑越可加事

110 一 山野共過木伐取ル者伐出ル過木不殘取上伐取之多少ヲ以罪越加ル事但前條同類之事

111 一 御留山ニ而柴薪ホ盜伐ル者過料^{〔儀〕}壹貫文尤伐取高多ル節ハ錢ニ差積一俵之過料可申付事御留山ニ無之共

御停止木伐荒ル者同類之事 〔二七ウ〕

112 一 山中伐荒レ有之科人不知知節ハ伐荒ル多少ヲ以山下村ヘ過料可申付ル事

113 一 但檢杣本之代リ小杉百本杉雜木杣本之代リ小杉五拾本^{〔儀〕}已年済伐荒之明所植付不相成ル処ハ手寄

空山見立植付ル様尤植付多時ニ三ヶ年五ヶ年之内

五二 流失流木盜揚ル者

〔本文欠〕

定

一 拾本以下

一 貫二百文

〔二八オ〕

一 拾本以上 一貫八百文

二 二拾本以上 二貫四百文

三 三拾本以上 三貫文

四 四拾本以上 三貫六百文

五 五拾本以上 四貫二百文

六 六拾本以上 四貫八百文

七 七拾本以上 五貫四百文

八 八拾本以上 六貫文 〔二八九ウ〕

九 九拾本以上 六貫六百文

一 百本以上 七貫二百文

五三 田畑穀物盜取ル者

116 一 田野之穀物越盜取ル者竊盜ニ準多少ヲ以罪越定ル事

但入墨同様之事

117 一 柴草木石之類人功ヲ以伐取積置ル越擅マ取ル者是又

同様之事但入墨許之

五四 夜中故なく人之家マ入ル者 〔二九オ〕

118 一 夜中故なく人家マ入ル者ハ鞭三若其家人即時ニ殺ル者ハ御搦無之若又既ニ捕立擅マ打擲イ多シ疵付ルハ、

平人打擲致ルニ等越減シ罪マ行ル事死マ至リルハハ鞭三十

五五 盜賊宿越イ多シル者

119 一 強盜之宿イ多シル者其身不行共財物分取ルハハ竊財

物取り不申ルハハ徒老年半鞭三十

120 一 竊盜之宿イ多シ財物ヲ分取ルハハ其身不行共竊盜

之首与可為同罪事財物越取り不申ルハハ一等越減可申 〔二九ウ〕

事入墨同様之事

121 一 強盜竊盜之盜物越乍存買取ル者品物錢ニ差積竊

盜之律マ二等越減シ罪マ行ル事乍存預置ル者又一等

越減シル事但品物高多共鞭十五ニ而許可申事実マ不

存ルハ、御搦無之品物本人江返シ可申事

〔五六 欠〕

122 手段ヲ投人越勾引ル者鞭三十因テ疵付ル者斬罪

モツケ

五七 入墨越拔取ル者

123 一 盜致入墨マ被行ル者其後竊マ拔ル者鞭三入墨仕直可申事 〔三〇オ〕

五八 謀書謀判い多しゆ者

124 一御印并奉行諸役人之判越似せ造り諸渡物ハ盜取ゆ者ハ

獄門未財物越不取ゆ者ハ死罪一等越減可申事

125 一似印形手紙或ハ古手形越取捨公私之者越取ゆ者ハ竊盜

ニ準錢之高ヲ以罪科之輕重越可行事但入墨同様之事

126 一語らひ手段ホニ而取ゆ者は又竊盜同様之事入墨許之

127 一物取無ニ申訳之為有合之印形押ゆ類ハ竊盜ニ準し

一等越減し可申事入墨免之 (三〇ウ)

五九 役人越似せゆ者

128 一似せ金越造りゆ者并私ニ錢越鑄ゆ者濼細工人同罪其余

加談之者死罪一等越減し可申事

〔六〇 欠〕

〔129 欠〕

六一 狂法賄賂之事

賄賂

狂法ノ贓ト云ハ金銀貨財ヲ取テ其罪ヲ見通

ヤルラーノ一ノト云

130 一賄賂ヲ以狂たる事越致ゆ者錢之高ヲ以輕重之罪ニ可行事

尤何人ヲ受ゆ而も物錢押合其高ヲ以罪越相定る事若

〔マ、ハ〕若犯ゆ事重くゆハ、人之罪越輕重い多しゆ律越以

て刑越加へゆ事

定

一五貫以下 鞭六 一五貫以上 同九

一十貫以上 同十二 一十五貫以上 同十五

一廿貫以上 同十八 一廿五貫以上 同廿一

一三十貫以上 同二十四 一三十五貫以上 同二十七

一四十貫以上 同三十 一四十五貫以上 (三二ウ)

一五十貫以上 鞭三年 (徒半年) 鞭三十

一二十貫以上 死刑代徒二年鞭三十

六二 不狂法賄賂之事

法ハ不狂共賄賂ヲ受ヲ云凡不義ノ財物ヲ贓ト云

131 一頼越受錢越取ゆハ狂たる事無之共物錢之高押合半分

ニして罪越定る事但老人ヲ受ゆハ 不致事

定

一十貫以下 鞭三 一十貫以上 同六

一二十貫以上 同九 一三十貫以上 同十二

料

一 四十貫以上 同十五 一 五十貫以上 同十八

一 六十貫以上 同廿一 一 七十貫以上 同廿四

一 八十貫以上 同廿七 一 九十貫以上 同三十

資

一 百貫以上 徒半年 鞭三十 徒一年 鞭三十

一 百二十貫以上 徒二年半 鞭三十

六三

坐贓之事

〔三三ウ〕

慈即反音賊吏受財也凡非理所得賄賂皆曰ト云

132

一 差而頼合之事も無之通例只財越受ゆ分ハ坐贓之罪
可行事尤惣錢半分ニ致ゆ而罪越定る事前条同様

之事尤与へゆ者之罪三等越減し可申事

定

一 十貫以下 戸メ二十日 一 十貫以上 戸メ三十日

一 二十貫以上 鞭三 一 三十貫以上 同六

一 四十貫以上 同九 一 五十貫以上 同十二

一 六十貫以上 鞭十五 一 七十貫以上 同十八

一 八十貫以上 同二十一 一 九十貫以上 同二十四

一 百貫以上 同二十七 一 百二十貫以上 同三十

六四

賄賂約諾い多しゆ者

133

一 賄賂約諾い多し未財物越手入不申共事狂ゆ者狂
法ニ準罪越可加事約諾而已ニ而未事越狂不申ゆハ不狂法
ニ準一等越減し罪越可加事

六五

賄賂越行ゆ者之事

〔三三ウ〕

134

一 下之者願事有之賄賂越行ゆ而法越狂ゆ事越得ゆハ差
出ゆ錢高ヲ以坐贓之律ニ當刑越可加事尤狂ゆ事重クハ
、重方ニ而沙汰可致事若上たる者強而差出ゆハ、御咎
無之事

六六

茂合取立私曲い多しゆ者

135

一 茂合錢差出私用ニ致ゆ者狂法ヲ以罪越行事音信ニ
相用得自分遣ふ不申とも同様之事

六七

田宅隠田畑

136

一 隠田畑い多しゆ者一反歩ノ五反歩迄鞭六五反歩ノ毎ニ
一等越加可申事但隠田畑御取上隠ゆ反畝老年の年貢

可差出事

137

一 御檢見之節悪地なと振替見せゆ者右之格ヲ以一等越
減し可申事尤反畝多共鞭十五ニ而許可申事村役之者

乍存見迹ニイ多し置ルハ、同罪之事若存ルハ、五反歩以下」許之五反歩已上ハ右之格にて三等越減し可申事尤反敵多共鞭九ニ而許可申事

六八

田畑質入

〔三四ウ〕

138

一年季ヲ以質入イ多しル者田畑年季相濟本人ル元利返濟受返越求ル得共外事ニ托し不相返年來押領致ル者鞭九但年來之小作米可令返事

六九

田畑押領

139

一人人之田畑越事ニ寄せ押領イ多しル者屋敷ハ老軒田畑ハ壹反歩ル五反歩迄鞭三五反歩毎ニ一等越加ヘ可申事尤反敵多共鞭十八ニ而用捨可致ル事但年來之小作米令返事前条同様之事

〔三五オ〕

倉庫

七〇

御收納之遲滞

一御收納ハ年々十一月晦日迄皆済可致事若翌正月迄無故して皆済無之者御收納之高十分ニ刻一分帯ルヘハ戸メ廿日壹分毎ニ一等越加ヘ可申事村役同様之事

七一

内借

141

一御藏廻之者御藏之米錢致内借ル者米錢之高ヲ以竊盜ニ準罪ニ行ヒ可申事若懸リ之者ニあらされハ一等越減し可申事 但入墨之ヲ免シル

〔三五ウ〕

〔142 欠〕

〔訴訟〕

七二

手越ニ訴状越差加ル者

143

一訴状越差出ルハ、其向之支配頭へ差出可申事手越イ多し」奉行御役人江差出ル而も取上申聞敷事若難相成義強而手越ニ出ルハ、戸メ三十日但願相立ヘク筋越支配ニ而取」押置或ハ支配頭非道之取扱有之越訴ル類ハ可為格別事」

七三

無名之訴状

〔三六オ〕

144

一無名之訴状投文致ル者鞭三訴状之趣取上致沙汰聞敷事

七四

不実之事致訴状ル者

145

一不実之事越申出人越罪ニ落さんとスル者鞭刑追放ニ可ヒ行事越訴ルヘハ可為追放事若死罪ニ可相成越訴ル

へハ鞭三十徒一年半

146 一若被訴ハ人御沙汰曰マ極リ其罪マ被行ハ後不実之事

頭ハハ、罪ムヒ行ハ者之刑ム一等越可加事死罪マ被行ハ

資 ハ、可為解死人事

〔三六ウ〕

〔147 欠〕

七五 親族相訴ハ者

148 一子孫与して祖父母ノノ之事越訴へ妻として夫并舅姑之

事越訴ハ者鞭三十虚説ヲ構裁許越願ハ者斬罪

149 一伯叔父姑兄姉之事越訴ハ者鞭十五訴ハ事偽ニハハ、平人

ノノ罪三等越可加事但ヒ訴ハ者ハ科人自身申出ハ律ム同

様之」事若伯叔父姑兄姉之非道之義有之不得止事申出ハ

ハ、可為格別事」

七六 子孫父母之教越背ハ者

150 一子孫として父母之教ヲ違或ハ養育欠ハ義有之者鞭

十五但父母之申出ニ寄刑越加へ可申事

〔三七オ〕

七七 訴訟之腰推い多シハ者

151 一訴訟之腰推い多シ或ハ人之為マ訴状越作り人越罪マ

落さんとい多シハ者本人と同罪之事

七八 強訴

152 一願難相立義越大勢徒黨い多シ支配頭之差圖越不相

用捨強訴ハ其棟梁致ハ者鞭廿四加談致ハ者一等越

可減事其余一通之余黨ハ吟味之上用捨可有事

〔三七ウ〕

七九 運上隠津出

153 一隠津出致ハ者品物取押鞭十五相對い多シ賦ハ者過料

屯メ式百文但式百俵以上之津出ハ家屋敷家財欠所

所拂可致ハ事

〔154 欠〕

八〇 隠荷揚

155 一旅船隠荷上致ハ者品物取押相對致ハ間屋鞆六家業

被放之

八一 隠商賣

156 一隠商賣い多シハ者品物取押過料錢可為差出ハ

事但過料之定別帳戸数条例有之

〔三八オ〕

雜犯

八二 博奕

157 一博奕致ゆる者鞭三其場之金錢没官可致事但宿致ゆる

者可為同罪事尤場ニ居合ゆる者之外同類有之共逸

々詮義不及事但輕宝引讀かるた致ゆる者戸メ三十日

八三 御用事越頼入致ゆる者 [三八ウ]

158 一御用事越曲て頼合い多しゆる者戸メ廿日頼ゆる者并頼ヲ

受ゆる人同罪之事若事已^(レ)行ゆるハ頼越受ゆる者ハ鞭六

頼ゆる者ハ親戚朋友之為^(レ)ハハ二等越可減事自分の

為^(レ)ハハ本罪之上ニ一等越加ゆる事尤曲ゆる事重くハハ

ハ人の罪越輕重い多しハ越以て刑越加ゆる事為是賄

賂越取ゆるハ狂法之律ヲ以て刑越加ゆる事

八四 人之罪越輕重致ゆる者

159 一依怙^(レ)負^(レ)以人の罪越輕重致ゆる者其増減致ゆる処ヲ [三九オ]

以て其外之罪越加ゆる事若或ハ全隠し全偽りゆるハ

其本罪ヲ以て刑越加ゆる事

八五 失火

160 一失火い多しゆる者戸メ二十日類焼有之ハハ三十日因て

人越燒ゆる得者鞭十五但一家内誰^(レ)而も手過チ致ゆる者江

刑越加ゆる事若御宗^(御)席御城^(御)焼失ニ至りゆるハ徒一年

半鞭三十

161 一諸役所并御藏内ニ於て失火い多しゆる者鞭二十四 [三九ウ]

[八六 欠]

[162 欠]

八七 御触越背ゆる者

163 一御ふれニ背ゆる者ハ事輕きハ戸メ十五日重きハ三十日

八八 不可為義ヲ致ゆる者

164 一不可為義ヲ致ゆる者事輕きハ戸メ廿日重きハ鞭三此ケ

条之義元來重科ハ律ニ正敷ケ条有之ハ得共輕キ

事ニ至ゆる事變萬端ケ条ニ難遂ゆる間右様之二等越分

け此ケ条ヲ以沙汰い多しゆる事

八九 科人手向い多しゆる者 [四〇オ]

165 一科人逃去り捕手之者へ手向致ゆる者本罪之上ニ二等越加可

申事尤人ニ疵付打傷ルヘハ斬罪

九〇

科人出奔

166 一穿破并預之内繩解出奔致ル者本罪ニ二等越可加事

〔167 欠〕

九一

科人越隠ル者

168 一科人御詮議之者越乍存隠置或ハ其子ニ告知らせ逃ル者ハ科人之罪ニ一等越可減事

九二

私ニ升秤越造ル者

〔四〇ウ〕

169 一私ニ升秤越造ル并通用升ヲ増減致ル者并升曲越致ルもの鞭六

九三

御関所忍通ル者

170 一御関所忍通ル者鞭九山越い多しル者鞭十二

九四

立帰ル者

171 一科有之御沙汰之上追放ヒ仰付御構之地ヘ立帰ル得

ハ鞭三本之如ク追放可致ル事

172 一悪事有之他国ヘ出奔致其後立帰忍居ル者ハ本罪ノ一等越可加事但本罪軽クハ、御関所忍通ル罪ニ一等越可加事

〔四一才〕

173 一悪事無之出奔之後立帰ル者御関所外ヘ出不申ルヘハ過代夫役二十日

九五

馬札紛失

〔174 欠〕

175 一馬札紛失い多しル者過料壹貫文

九六

犯姦

〔四一ウ〕

176 一姦淫之者鞭九男女同罪なるヘク事夫有之者ハ鞭三十強姦之者ハ徒一年半鞭三十未成者ハ鞭三十

177 一幼少十二才以下越姦ル者強姦同様之事

178 一妻女越許して姦越致せしもの本夫姦婦何連も同罪之事

一右何連も姦所於て見届慥成證據有之夫或ハ親類

ル申出ニ寄御沙汰可致事外ル訴ル類ハ御取上無之

九七

僧尼犯姦

〔四二オ〕

右之外略之

180

一 僧尼之姦犯之者ハ平人姦淫之罪ニ一等越加ヘ還俗
為致ル事相姦ル者ハ平人姦淫之罪ニ行ル事

〔六行空白〕

法律秘畧終

〔四三ウ〕

九八

下人家長之妻ハ女越姦ル者

181

一 下人として主人の妻女越姦ル者斬罪妾ハ一等越減シ
可申事

九九

相對死

182

一 男女申合相果ル者子細無之ハ、死骸取捨若女越前ニ
殺シ男存命ニルヘハ解死人男相果女存命ニルヘハ

〔四二ウ〕

解死人ニ不及三日肆之上乞食手ヘ相渡ル事

183

一 男女共疵付ル斗ニ而存命ニルヘハ是又三日肆之上乞食
手ヘ相渡可申事

184

一 主人下人と申合相果ル者ハ下人相果主人存命ニルヘハ
解死人ニ不及乞食手ヘ相渡主人相果下人存命ニルヘハ

獄門

一〇〇

隠遊女

185 一 御免之場所之外抱置渡世之者鞭三

〔四三オ〕

『法律秘略』は、題箋に補記されているように「弘前藩」の「一名寛政律又藩律」である。昭和四九（一九七四）年に葛西慎一郎氏から弘前市立弘前図書館に寄贈されたもので、現在は同図書館の所蔵になる（配架番号K三二二・五一六一）。同館の目録には「写 一冊 半紙 和」とのみ記す。⁽³⁾

その大きさは、縦二四・三センチ、横一七・二センチである。表紙は反古紙を継ぎ合せて墨付の裏に茶渋をひいた面を表とし、裏打ちに少し小さめの白紙を貼り合せた紙を用い、表・裏表紙を兼ねる。すなわち中央で二つ折にして本文を挟み、黒糸と茶糸を撚りあわせた細紐で四目綴している。表の左端上寄りの題箋は白半紙を切ったものを貼っているが、すり切れており、横三・八センチ、縦一五・二センチ以上としかいえない。最初「法律秘略 完」としたのを同筆で後補し、右肩に「弘前藩」、左横に「一名寛政律又藩律」と記す。右肩に小さなラベルが三枚貼られるが、内二枚は記載した文字を抹消しており読み取れず、一枚は未記入である。右下に現在の架蔵ラベルが貼られている。

内表紙に一丁が当てられ、中央に一行「法律秘略一名寛政律」と記す。本文墨付は四三丁から成るので、内表紙と合わせて四四丁となる。

本文第一丁には多数の蔵書印が見られる。右肩には朱正方印「中村文庫」（一辺二・ミリ弱）を捺し、その下に小形の朱正方印と朱長方印（末尾は書と読める）があるが、いずれも文字は朱で抹消され、判読できない。右下寄りの朱長方印は双行で「弘前□□蔵」とある。他に右下隅および上端に弘前図書館の蔵書印・受入印が三カ所捺されている。それによれば「昭和四九年六月 葛西慎一郎寄贈」「登録 旧三四六九一号 昭和四九年六月六日受入」とある。

本文中の書入れや朱書は一切なく、母本からの転写以外に付加した内容は見られぬようである。誤写の訂正は当該箇所を白抹した上に再度記入している。なお白抹は、本文九丁裏、一〇丁表、一三丁表、一四丁裏、一九丁裏、二〇丁裏、二三丁表、二四丁裏、三三丁裏、三四丁表、同裏、三八丁表に認められるが、いずれも一、二字もしくは四、五字を直す程度で、別本との校合といったものではない。

内容は、冒頭の目録や覚、末尾の附等は一切伴わず、「此度御刑法改被仰付候二付」云々に始まり、一〇〇隠遊女で終る。末尾に「右之外略之」とあるのが、母本にあったのを省略したことを意味するのだろうか。

項目名の欠けているのは、一六・四九・五六・六〇・八六で、

条文の欠けているのは、107・129・142・147・154・162・167・174条で、115条は本文を欠いている。このうち、一六および115・129・147・154・167条は、これまで紹介した(二)～(十二)にはいずれも存在し、本書のみこれらを欠いている。

六〇の表題は(九)のみ朱書で後補しているが、他書にはすべて存在する。八六も(五)のみ本書と同様に表題を欠く。162条を欠くのは他に(五)(九)のみである。

四九の表題を欠くのは、他に(六)(八)(九)(十一)で、(五)も朱書による後補であり、同様と見なせよう。107条が存在するのは、(二)(四)(十)のみで、他の(三)(五)～(九)(十一)はいずれもこれを欠き、本書も後者に含まれる。

五六の表題が存在するのは(四)(十)で、(三)は末尾にこの項目全体を配する。(五)は朱書で後補したものであり、他の(二)(六)(八)(九)(十一)と本書はこれを欠く。142条を欠くのは本書の他に(二)(五)(九)(十)がある。174条が存在するのは(二)(七)(十)のみで、本書の他に(三)(四)(五)(九)(十一)がこれを欠く。

六一・六二・六三にはそれぞれ書入れがみられる。六一で書入れのあるのは(三)(五)(六)(九)(十一)と本書である。六二で書入れのあるのは(二)(五)(九)と本書である。六三

で書入れのあるのは(二)(五)(九)と本書で、(十一)には異なる書入れがある。

なお112～114条については混乱があるが、113条のみに触れておくと、本書では「但松老本之代り…」をあてたが、本来は「無極印之材木…」が本文にあるもので、本書はこれを欠く場合である。(二)では113条本文とは別に但書は111条の後、112条の前に位置する。本文と但書が順に並ぶのは(三)(十一)で、本文のみは(七)(八)(十)、但書のみは(五)(六)(九)と本書である。(四)では112条の後に但書と114条が小字で書かれた後に113条本文がある。編集上の乱れ、後補に伴う混乱の一端であろう。

以上を通して見ると、本書は(五)(九)に比較的近い本であるといえよう。

註(31) 弘前市立弘前図書館『弘前図書館郷土資料目録』第一〇巻—弘前図書館一般郷土資料目録その三—(昭和五三年三月)、三七頁。

本稿は、大阪経済法科大学平成元(一九八九)年度研究奨励金による成果の一部である。

付7 『要記秘鑑』三十四(二・完)

〔三六〕 變 鐘 失物 咎人 盜賊

御預 遠慮 闕所 評定所

609 延享元年六月六日 八月四日御免

〔七四四〕 御臺所吟味役原喜左衛門、御中陰之内家來江手疵負セ

遠慮伺之通、

610 延享五年二月廿日 三月十五日御免

〔七四八〕 樽番之諸手足輕相馬久五郎・工藤新之丞、一昨日出火之

節、鐘遲成、急度押入置ル様申付之、

611 宝曆二年九月十二日

〔七五二〕 一青森町奉行藤田八大夫申立ル、同所之著所拂被仰付ル

所、不心付ニ而「闕所申付、遠慮伺申出之、不及遠慮旨

被仰付之、」

612 宝曆十年二月十九日 同廿三日御免

〔七六〇〕 一御徒目付工藤八之丞、先月廿六日岩間兵左衛門・中村彦

八上ケ「家屋、屋敷奉行受取ル節、立合之所、右ニケ所家
内通建」具ホ不足相見得ル部、逐一不申上、遠慮伺之通、
一足輕目付佐藤七左衛門・関格十郎、右同断ニ付遠慮伺之
通、」

〔三二オ〕
一右ニケ所屋敷引渡ル節、不埒ニ付、親類六人ル遠慮伺
申出之、不及遠慮、

613 明和三年六月十四日 同廿三日御免

〔七六六〕 一御徒目付齋藤勘太左衛門申立ル、七戸民藏儀ニ付、高木

勇助「遠慮伺差上、不及遠慮旨被仰付ル所、通用違仕、

相慎セル」ニ付、遠慮伺之通、

614 明和九年三月廿六日

〔七七二〕 一御目付小笠原久藏、昨晚御廣敷油番之處、地震ニ付當番

之面々御錠口相通ルニ付、遠慮伺申出之、変ニ付差懸リ

御錠口相通ル段承届ル、不及遠慮旨申遣之、

615 安永二年正月十九日 同廿五日御免

〔七七八〕 一郡所物書加勢三浦吉左衛門、昨夜泊番之處、消炭入ル桶

之内「火運も少々焦ルニ付、遠慮伺之通、

616 ^{〔七七四〕}
安永三年八月廿日

一 深浦町奉行進藤庄兵衛・菊池源太左衛門申立、同所町
之者「福右衛門と申者、時疫相煩熱ニ被犯、古井之内江落
入変死之節」取扱不吟味ニ付、遠慮伺申出之、不及遠慮、

617 ^{〔七七七〕}
安永六年七月十七日 同廿四日御免

一 諸手足軽原田安之助・神八郎次、一昨晩東長町出火之節、
鐘遅成、^{〔三二ウ〕}ニ付、呵置の旨申出之、承届、

618 ^{〔七七八〕}
安永七年十一月十九日

一 御書役工藤傳兵衛、於江戸表召使の家來定八、衣類ホ盜
取欠落仕、^{〔三二ウ〕}ニ付、召捕、願之上、小人部屋江入置罷下
所、先頃「被行死罪の旨、承知仕、御取扱ニ罷成、遠慮
伺申出之、」不及遠慮旨被仰付之、

一 御小性組唐牛三左衛門、於江戸召使の家來不埒之儀御座
^{〔三二ウ〕}ニ付「此度御成敗被仰付の旨承知仕、御取扱ニ罷成、遠
慮伺申」出之、不及遠慮旨申出之、

619 ^{〔七七九〕}
安永八年十一月七日 同十一日御免

一 青森町奉行對馬彦左衛門、青森用心廻萬助と申者、預置

「^{〔三二ウ〕}」盗人取逃、^{〔三二ウ〕}ニ付、呵置の得共、町中用心向之儀ニ付、

差許申付の旨、申上、各人預り取逃の儀、左様勿緒
差許の儀無之筈」之旨被仰付、心得違ニ付遠慮伺之通、

620 ^{〔七八〇〕}
天明二年二月八日 同十一日御免

一 御徒釜港兵七、宮川彦六方ニ而被盗取の家業札、屋敷之
内ニ「有之、伺なし、同人江相返、御尋ニ付、心得
違、遠慮伺之通、」

621
同年五月朔日 同七日御免

一 御目付小山与三左衛門、評定所申渡御用御座の節、取扱
心得違、「遠慮伺之通、」^{〔三三才〕}

一 御徒目付大高忠次、於評定所御追放者御座の所、弘前附
添之儀心得違、木村此吉江心付ニ付、遠慮伺之通、

622
天明二年八月四日

一 御手廻原子弥太右衛門、清野次五兵衛儀ニ付御尋之御用
有之、慎「被仰付、右御用相済ニ付、慎御免、是迄之
通相勤の儀被仰付の処、」御取扱ニ相成ニ付、遠慮伺
申出之、不及遠慮、

料

一御徒平井要藏、右同断ニ付、遠慮伺申出之、不及遠慮、

資

一御馬廻田中友次郎・今藏之進、碓ヶ關御飯屋ニ而紛失物

有之、遠慮伺之通、

623

〔二七八四〕
天明四年二月十六日

624

同年五月十五日 同十七日御免

一御小納戸小館専藏、預り所御物置御坊主葛西林嘉と申者雨戸押明取入のニ付、御場所柄恐入、遠慮伺之通、

625

〔二七八五〕
天明五年十二月十九日

一表右筆今井文右衛門・相馬又次郎・中田彦左衛門・齋藤福之丞申出の、岡本弥吉郎遠慮日数可奉伺所、不申上、遠慮伺申出之、御「用終被仰付の、〔三三三ウ〕

626

〔二七八七〕
天明七年八月四日 同七日差許伺之通

一講手足輕須藤次部之助・齋藤万藏、去月卅日出火之節、早鐘撞セ」不申、不之勤方ニ付、呵置の旨申出之、承届、

627

同年十一月二日 同八日御免

一御馬廻水口源次郎、御預被仰付の福沢文司娘病死之処、御断」不申上、御僉議ニ付、遠慮伺之通、

628

〔二七八八〕
天明八年十二月廿日

一御家具之者齋藤吉兵衛・前田善右衛門、御尋之御用有之、慎申付」置の所、御尋之御用相済申の問、慎御免、是迄之通相動」の様申付之、翌廿一日御取扱ニ相成のニ付、遠慮伺之通、同廿四日」御免、

629

〔二七八〇〕
寛政二年八月十日

一笠原兵司申出の、去四日之夜出火之節、方角不分明之処、差圖」仕、早鐘撞セの段、恐入のニ付、御奉公遠慮伺申出之、不及遠慮、」

630

〔二七八二〕
寛政四年七月十九日

一建部菊大夫申出の、去ル十五日大間越大風ニ而、町々及飢渴のニ付、」焚出申付、私并警固動番同心共食事相整、町々数百人之男女相救申の、御藏米差出焚出仕、急変之儀難奉伺、」奉恐入の得共、右之通取扱任のニ付、遠慮伺申出、不及旨被仰付の、」

631 寛政六年八月十日 同十二日御免

一笠原兵司火消番之処、一昨日日出火之節、火元江罷出不申
ルニ付、「遠慮伺之通、」

632 寛政九年九月四日 同六日御免

一青森町奉行菊池幸八儀、同所町同心四人、當二月御用錢
紛失」之儀、外場所と違、於役所右様不メニ付、遠慮伺
之通、」

633 寛政十一年八月十五日 同十七日御免

一御代官安田吉郎・岩渕八右衛門儀、當三月組役所詰合之
処、盜一人入、手代共預御用錢之内被盜取ルニ付、僉議
之処、熊嶋」村茂右衛門・同村佐助所為ニ付、此度夫々
御制道被仰付、其節詰」合之手代長内文之助儀、戸メ被
仰付、恐入ルニ付、遠慮伺之通、」

634 寛政十二年正月廿四日 同廿六日御免

一三上勘十郎、旧冬唐内坂御茶屋泊番之節、御預之御幕
老張、附小入木作村権吉盜取出奔ニ付、遠慮伺之通、
二月朔日、佐野周助も、右之儀ニ付遠慮伺申出之、不

及遠慮、」

635 同年四月八日 同十日御免

一三上嘉兵衛、居宅類焼之処、御手入方ニ御下ケ被差置ル
御具」足焼失ニ付、遠慮伺之通、
〔三四五〕

一四月十四日、鎌田久藏儀、嘉兵衛組合御具足御手入之
処、居宅」手狹ニ付、嘉兵衛方江斗差置ル所、焼失ニ付、
遠慮伺御用捨、」

〔三七〕 遠慮 慎 御呵

636 元文三年五月廿六日

一家老隈部伊織殿、棟方作右衛門殿被申ル者、於御用人宅
申」渡ル儀、御中小性以上、大目付出座之旨ニ得共、
無調法有之、自」分申立、遠慮被仰付ル面々、遠慮御
免申渡ル節ハ、長柄」奉行以上ハ、大目付出座、右以下
御目付出座ル様、以後相心得ル様、」可申旨、御申之事、
但御呵筋ニ得ルハ、脇差取セル事、御呵ホニ而慎罷有、
追而御免」之節ハ、脇差帶罷出ル、

637 宝曆十一年七月五日

一御家中之面々、自分并組支配親族之儀ニ付、御奉公差〔三五才〕伺差出置、御沙汰無之内ハ、在宿仕、相慎可罷有儀〔三五才〕、
 老人役」〔三五才〕、御用差支之族ハ、支配頭江其段相違、可任
 差圖〔三五才〕、或ハ」輕キ品之間違、是式之儀、遠慮伺ニも及間
 敷儀、乍去」伺をハ差出置〔三五才〕、御政事を輕し仕
 方〔三五才〕有之間敷」儀ニも、自分決兼儀ハ、支配頭江内意を
 承合〔三五才〕而、得差圖、」取斗可申事ニも、右之趣何レも与得
 存辨、不敬之仕方無之様、」向寄通達可有之儀、以上、
 右之通、於江戸表被仰出〔三五才〕旨、御用状ニ而申來之、

638

〔三七七〕
 安永二年正月十八日

一組支配之内、永之御暇被下置、或ハ御役下〔三七七〕被仰付〔三七七〕而
 も、預組」并支配組之分ハ、其頭遠慮伺〔三七七〕而も、不被仰
 付〔三七七〕、尤直組之」分ハ、是迄之通、遠慮被仰付〔三七七〕筈、
 一江戸勝手組支配之儀ニ付、於御元頭方遠慮伺差出〔三七七〕し、
 伺之通被仰付〔三七七〕儀も有之、區々ニ付、以來、右之部遠慮
 不被」仰付〔三七七〕、尤右頭方江戸詰之節、江戸表ニ而ハ、遠
 慮被仰付〔三七七〕筈、」
 右之通被仰付之、

639

年号不知

一六四

一支配不調法有之、御役下并重キ御咎被仰付〔三五才〕而も、頭方
 遠慮伺不」差出役々之部、左之通、

大目付、四奉行、山奉行、御目付、九浦町奉行、作事
 奉行、」
〔三五才〕

一御家中百性無調法〔三五才〕有之、追放御仕置〔三五才〕被仰付〔三五才〕、地
 頭〔三五才〕遠慮」之儀、申出〔三五才〕而も、不及旨被仰付〔三五才〕事、

一家來変死之節ハ、主人遠慮伺差出〔三五才〕ニ不及〔三五才〕事、

一忤無調法ニ而退役被仰付、或ハ見習席引取被仰付〔三五才〕得ハ、
 父五日、子兄弟」七日、祖父孫三日、頭方直頭番頭三日
 ツ、遠慮被仰付〔三五才〕、其外ハ御用捨」被仰付之、

640

〔三七八〕
 明和七年八月十六日

一御城代并三組頭江、左之通、
 與力〔三七八〕親類之儀ニ付、御奉公遠慮伺申出〔三七八〕ニ付、被遣〔三七八〕
 得共、与力遠慮伺之」儀ハ、各様ニ而承届、吟味之上被
 仰付〔三七八〕様、尤差許〔三七八〕節ハ、拙者共江申聞、其」上御免之
 儀、拙者共ハ申進旨書付相返、」

但安永二年八月八日、右同様被仰付〔三七八〕、以下同断、

641 ^{〔七四四〕}
安永三年二月卅日

一御留守居組頭遠慮被仰付の節、御家老を被仰付、然共御用人を被仰付の儀も有之由得共、以來、御家老を被仰付の事、

642 同年八月二日

一先月中、御奉公遠慮被仰付の面々之内、今晚御免被仰付の族有之由、唯今迄へ、先月之御用番を而申渡來由得共、以來、翌月の月番を而取扱の様被仰付、

643

^{〔七四四〕}
延享元年九月廿九日 十月廿九日御免

一御馬廻組頭添田儀左衛門、御奉公不動之上、壯年罷成、^{〔三六才〕}
一向文武之、修学志無之段、被及御聴をニ付、遠慮被仰付之、

644

^{〔七四二〕}
寛延二年正月廿二日 三月十七日御免

一町年寄松井四郎兵衛、町人共江自分之用事度々申懸、我儀之、致方共有之段、相聞得、急度慎罷有の様申付の様、町奉行江申遣之、同日町奉行申出由へ、松井四郎兵衛儀無調法之儀有之、急度相慎罷在の様被仰付、門閉相

慎の様可申付の哉、慎一通之儀を而者、前々門閉不申のニ付、奉伺旨申出之、門閉の様申付之、

645

^{〔七五七〕}
明和四年十月廿七日 十一月廿五日御免

一御手廻菊池形左衛門忤、御馬廻庄司方江御留守居組黒瀧茂右衛門、妹縁組願、未被仰付無之内、内々を而引取の段、相聞得、御裁許を、輕シの仕方、不埒之至ニ付、遠慮被仰付之、右ニ付、忤庄司を遠慮伺之通、
一黒瀧茂右衛門、右同断遠慮被仰付之、

646

^{〔七五七〕}
明和八年三月十二日

一於添田儀左衛門宅、野呂勘解由江申渡之覚、去ル八日、今井弁吉儀御用之儀有之、頭源大夫宅江相詰の様申付由、同人幼少之儀故、誰成共名代相頼可差出の所、蒙、御阿の隠居小左衛門名代之由を而、罷出の段、不届之至ニ由、依而小左衛門儀、急度相慎罷在の様被仰付之、

同十七日、弁吉申立由、私儀去ル八日御用之儀御座のニ付、名代竹内^{〔三六才〕}源大夫殿御宅江相詰可申旨被仰付の所、親小左衛門罷出、御礼廻共、相動の段、無調法

ニ付、小左衛門儀慎被仰付罷有_レ、依之私御奉_レ公遠慮奉伺旨申出_レ、幼少之儀故、以御用捨不及遠慮旨_レ申遣之、同五月二日小左衛門慎御免、

647 明和八年十月三日

一 戸定兵衛、青森御目付代被仰付罷下_リ、罷上_リの儀、痲病ニ而_レ青森町端_ニ弘前町端迄、伺も不申上、山鴛籠相用の儀、「心得違、遠慮伺之通、

同十一月四日悴惣助申立_レ、親定兵衛儀心得違之儀御座_レニ付、御_レ奉公遠慮、伺之通被仰付、去月三日_ニ相悞罷有_レ、依之私御奉公_レ遠慮奉伺旨申出_レ、伺之通申付_レ之、_レ

但右惣助儀、親定兵衛遠慮被仰付_レ則日_ニも慎相伺可_レ申処、「既_ニ及三十日、右慎之儀伺不申出、上_ル御不_レ審之上_ニ而申出_レ、_レ

同十二月十六日右定兵衛儀、青森在番交代之節、伺も無_レ之駕_レ籠相用得、其上遠慮中不悞之段、相聞得_レニ付、隠居被仰付、「悴惣助江跡式無相違被下置_レ之、

648

明和九年十一月廿日 十二月八日御免

一 御醫者高橋昌元、御停止之他借致_シ、御取扱_ニ罷成_レニ付、「御国元江引越被仰付、遠慮被仰付之、_レ〔三七オ〕

649 明和九年十一月十一日

一 田中左次馬申出_レ、御徒三上権藏儀、於江戸他借御停止_レ之處、他借仕_レ段、心得違_ニ付、私共_ニ而呵置_レ様被仰付、於私宅申渡之上_ニ、呵置申_レ、尤同人儀、徳田町高木助九郎方_ニ借宅_ニ而罷有_レ間、「同所_ニ而慎申付置_レ旨申出_レ、承届_レ、_レ

650 明和七年八月十六日

一 御城代并三組頭江左之通、

与力_ニ、親類之儀_ニ付御奉公遠慮伺申出_レニ付、被遣_レ得共、与力遠_レ慮有無之儀_ハ、各様_ニ而承届、吟味之上被仰付_レ様_ニ、尤差許_レ之節_ハ「拙者共江申聞、其上御免之儀、拙者共_ニ申進_レ間、別紙伺書_レ致返進_レ、此末共右之通被仰付_レ間、左様御心得可被成旨申遣_レ之、_レ

但安永二年八月八日_ニも、右同様之儀有_レ之、

651

安永二年六月三日 七月廿三日御免

654

〔三七四〕
安永三年七月廿三日 八月十二日御免

一 青森町奉行石岡勘四郎・對馬彦左衛門、支配所取扱方緩
七ニ付、遠慮被仰付之、
右ニ付、町年寄式人共、戸メ被仰付之、
同年十一月十六日
一 御手廻佐々木源内、勘定人棟方弥五左衛門、當秋御檢見
人被」仰付所、百性共下ケ札江落書ホ致シ、其上狼成
事共有之、」勤方不メニ付、遠慮被仰付之、 〔三七ウ〕
十二月十七日御免、自分遠慮伺之通、三日目ニ而御免、
安永二年十一月廿七日 十二月廿日御免
一 御留守居組頭山内弥五兵衛江申渡者、御自分組堀口安
兵衛儀」言語道断不届之致方ニ付、昨日被行斬罪也、惣
而組中取扱」之儀ハ、寛文中御條目之筋、且又近年別
而被仰出也」有之由間、致教訓也ハ、如此ニ至り申間
敷、若意見ホ不相用由節ハ、取扱之致方も可有之、其通
リニ致置由段、必竟常々組中善惡とも取扱、等閑ニ相聞
得、不届ニ被思召也、仍而急度遠慮被仰付之、

652

同年十一月十六日

一 御手廻工藤弥門・今永次郎、石渡御藏方勤中、別而相替
由致」方無之由得共、御藏開之節、於御役所酒宴ヲ相催
シ、唱物ホ」致由段、不埒之至り、其上立合、同役ニ而
一 戸源次郎致方一向」不存由儀、旁不メ之勤方ニ付、御
奉公遠慮被仰付之、」
自分遠慮伺之通、三日目ニ而御免、

653

安永二年十一月廿七日 十二月廿日御免

一 御留守居組頭津軽文藏・御馬廻組頭西館織部儀、組乳井
左市郎・原子左太郎、長町御藏不届之勤方ニ付、急度
被仰付也、然処頭方江も兼々被仰出之趣も有之処ニ、不
埒之」申出之趣、甚心得違、御不承知ニ被思召也、依
之御奉公遠」慮被仰付之、
同十三日、自分遠慮伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、

656

安永三年七月廿三日 八月廿二日御免

一 御留守居組頭竹内源大夫・山中六左衛門儀、一 戸惣助遠
慮被仰付」由砌、同役山内弥五兵衛、廻文間違之筋有之
由所、取扱方不宜、」遠慮被仰付之、 自分遠慮伺之通、
三日目ニ而御免、」

655

同日 十一月四日御免

一 御馬廻工藤弥門・今永次郎、石渡御藏方勤中、別而相替
由致」方無之由得共、御藏開之節、於御役所酒宴ヲ相催
シ、唱物ホ」致由段、不埒之至り、其上立合、同役ニ而
一 戸源次郎致方一向」不存由儀、旁不メ之勤方ニ付、御
奉公遠慮被仰付之、」
自分遠慮伺之通、三日目ニ而御免、

〔二七七五〕
安永四年正月廿九日 二月四日御免

一諸手物頭毛内有右衛門、去ル七日披露之節、心得違之儀有之、并御「留守居支配之跡、組之者ニ被仰付所、幼若者ニ付、書付ヲ以」申立之儀、旁上ヲ輕シム致方ニ付、御口達ニ而委細被仰渡之、

同年二月十六日

一御醫者高橋昌元、不行跡ニ付、急度可被仰付得共、御側勤「而已於召放、其後段々之訳ニ付、御国引越被仰付所、夫婦共」不行跡、其上諸借金返弁方、不埒ニ付、被仰付方も有之由得共、此地ニ而多親類寄方も無之者故、此度ハ御用捨ヲ以、已來夫「婦共言行相慎之様、被仰付之、

〔二七七七〕
安永六年二月十六日

一寄合不殘、青森御目付代并高岡御番両在勤差懸リ、病氣ホニ相成、我佞成風儀ニ成來、近年別而御取扱ニ相成之、ニ付、急度御呵被仰付之、
〔三八ウ〕
一貴田忠吉郎、両在勤御用捨ニ付、別ニ左様無之様、同役申合之様、「口達書を以申渡之、
右恐入、遠慮伺申出之、御用捨ヲ以不及遠慮、

〔二七七九〕
安永八年正月廿日

一坊主頭江口達、左之通、
惣而、表坊主共、對諸士平外之儀無之様ニ、前以被仰付罷有之所、近「來緩セニ罷成、公私之取次ホ頼合ニ而相勤之様ニ相聞得之者共、」粗有之様相聞得、心得違之儀ニ由、向後各ニ而急度申合之様被「仰付之、
右口達書於御用所、坊主頭江口達、

同年七月十五日

一於喜多村監物宅、町奉行江相渡之口達書、左之通、
町年寄ニも限り由事ニ無之、同役有之分ハ、御取扱ニハ連名ニ而「差出由得ハ、申付由ニ不及、通例之事ニ由、勿論太切成御奉公遠慮」伺申上之儀、一名ニ無之由而難相濟事を、連名ニ而申出由事、必竟「敬恭之心薄ク、実ハ上ヲ蔑ニ致由仕方、不屈之至由、然ルニ拾」ケ年前、連名ニ而申上由得共、其節御不審無之ハ、「〔三九オ〕御憐愍共不存、仰山ニ書出シ申由儀、重々不埒至極由、乍然」町年寄之儀ハ、町家同意之儀不行届心得違も可有之、右支「配も被仰付相勤由、町奉行ケ様ニ支配之不埒成儀ニ付、教化も」不致、書付差出由儀ハ、思慮勘弁も

663

〔二七八〇〕
安永九年五月六日

一 四奉行、百沢寺用達太田藤藏落口之筋有之由所、一逼之矣議ニ而「強而御片付之儀沙汰申出、御不審ニ寄、再藤藏僉議之処、及白」状、仍而無調法之段、遠慮伺申出由所、被仰出由者、
一 林、口問之儀、罪科之深淺明白ニ尋問、可致沙汰儀、

662

安永八年十二月十七日

一作事奉行申出由、鳶小頭権八、鳶之者浪藏・鴨七勤方緩怠ニ付「慎申付置由所、日数ニも相成由ニ付、慎差許申付由旨、手紙ニ而申出之、」此度之儀ハ承届由、以來之儀、伺之上差許申付由様申付旨申遣之、

無之、唯書付取次も同「意ニ而、支配頭之勤方等閑之至り、惣町中御預ニ如此儀ニ而ハ、」彼是ニ付、無覺束事共ニ有之由、右之儀表立被仰付由ハ、此一「条ニ而御役儀之筋ニ拘リ由間、此度ハ御用捨ニ而被仰付由、已來」之処能々相心得相勤由様被仰付之、
右町年寄兩人共、去ル十三日御奉公遠慮伺差出由所、連名ニ而「書付差出由ニ付、右之通口達被仰付之、

665

〔二七八一〕
天明元年八月十六日

一 諸手物頭成田文左衛門、組足輕山片久兵衛病死跡養子ヲ実子ニ申立、「殊ニ去冬御暇被下由大工長之助ヲ申立由段、不届ニ付、御役御」役知共被召上、慎被仰付之、
九月十六日慎 御免、五浦町奉行次順被仰付之、
右ニ付、同役小笠原無右衛門・松田兼次郎隠居被仰付、山田庄藏「御役被召放、其外數人御呵ム被仰付之、

664

安永九年八月廿三日 九月四日御免

尤品ニ寄「白状為致、却而及大事由様成事、用捨心得も可有之由所、無故忽緒」之沙汰ニ被思召由、後來急度相心得由様、此度ハ御用捨ヲ以不及遠「〔三九ウ〕
一 大組警固桜田四五右衛門、當夏御献上藤御荷物之節、手代」共江差圖致シ、脇道相廻、其上乍少分御荷物痛損由之段、「不届ニ付、急度呵之上押込由様申遣之、
一 諸手足輕坂元長右衛門・須藤弥右衛門、右警固差圖ニ而、脇道相廻」由段、不届ニ付、此度ハ御用捨被仰付由、以來右林之儀無之様、急」度呵置由様申遣之、

料 同年十二月廿六日

666

資

一御手廻井上勘左衛門・北原斎、鯁ヶ沢湊目付被仰付_レ所、大坂三十郎、船糧米積出、不吟味ニ付、遠慮被仰付之、一鯁ヶ沢町奉行西館平馬、右不吟味ニ付、遠慮被仰付之、〔四〇才〕同二年正月廿六日、井上勘左衛門・北原斎、遠慮御免、自分遠慮_レ伺之通三日目ニ而御免、

二月十六日、西館平馬、遠慮御免、自分遠慮、伺之通同断、

天明元年十二月廿六日

667

一深浦湊目付間宮金左衛門・佐藤兵左衛門・菊池理左衛門、隠津出鴨敷_レ有之処、不吟味ニ付、遠慮被仰付之、同二年正月十七日、間宮金大夫遠慮御免、自分遠慮、伺之通、_レ三日目ニ而御免、同二年正月廿六日、佐藤兵左衛門・菊池理左衛門、遠慮御免、自分_レ遠慮、伺之通三日目御免、

〔七八〕
天明二年正月十七日

668

一御家老附表右筆吉村太右衛門・前田源次郎、御用認物_ホ惣而_レ魚相成儀共有之、向後急度相心得可相勤旨被仰付之、右ニ付_レ遠慮伺申出之、此度ハ御用捨_ヲ以、不及遠

慮旨被仰付之、_レ

一七〇

669 同廿日 同廿四日御免

一坊主小頭兩人、去ル十六日御用初之節、御詰所火鉢間違_レ差出_ルニ付、_レ慎申付_ル旨申遣之、

670 同年二月十三日 三月十四日御免

一寺社奉行對馬武左衛門・秋元金九郎、去十月大善院疵_ヲ得_ル所、御_レ僉議之処、一切不存趣申出_ル得共、畢竟支配方取扱常々等閑_レ故之儀、不届ニ付、御奉公遠慮被仰付之、_レ

自分遠慮、伺之通三日目御免、此節金九郎悴六郎、遠慮御免不被仰付内、親自分遠慮伺之通被仰付_ルニ付、親自分_レ遠慮御免之節、一所ニ御免、

671 同年五月十六日

一坊主頭福士長砂、支配取扱緩セ、支配之者度々不埒有之_ルニ付、_レ遠慮被仰付之、

六月六日御免、自分遠慮、伺之通三日目ニ而御免、

672 同年八月三日

一 御手廻佐藤茂左衛門・築館庄右衛門、當春深浦湊目付勤中、隠米屯」俵見當押取の所、町役之者願由ニ而、内濟ニ取扱置、僉議方及」遲滞、御糺明被仰付の所、右袴之取扱無之旨申出之、緩セ之勤」方不屈ニ付、遠慮被仰付之、九月二日御免、自分遠慮伺無之、

673 同年九月十三日

一 勘定奉行原子藤兵衛、公用鉛御積登セニ付、浦賀御関所「證文、度々間違、公邊御用筋粗末投遣之取扱、不埒ニ付、鉛」御用懸御取放之上、遠慮被仰付之、〔四一才〕一 勘定小頭唐牛木工大夫、右同断ニ付、遠慮被仰付之、十月三日御免、自分遠慮伺之通、三日目御免、

674 天明六年二月十五日

一 山野十右衛門申出の、工藤文右衛門御役下被仰付のニ付、御奉公遠慮」伺之通申付の旨、紙面ニ而申出のニ付、左之通」御徒小頭工藤文右衛門儀、御目見以下御留守居支配被仰付のニ付、」御奉公遠慮伺申出の所、各様ニ而被仰付

置の旨、昨日御紙面ニも」被仰聞の儀、御心違ニ御座の、

一 袴 御目見以下之者と違、」

御目見以上之御目見以下被仰付の者、右ニ付遠慮伺之儀者、書付ニ而御用所江御出シ被成、内之儀ニ御座の間、以來ハ左様無御」座の様ニ、可被仰付合旨、手紙ニ而申遣之、

675 天明三年九月廿三日

一 御目見以上御留守居支配長谷川権六儀、嫡子笹森左兵衛弟庄八」実方江相返の儀、伺之上可任差圖所、双方心得違之儀有之のニ付、」遠慮被仰付之、一 御手廻与力笹森佐兵衛儀、右同断ニ付、遠慮被仰付之、十月五日御免、自分遠慮伺之通、三日目御免、

676 天明三年十一月十日

一 御家老森岡主膳申立の、不屑之私重キ御役職迄御取立被成下、難有仕合奉存の、今日 御自筆御書付ニ而被仰出の趣、」無調法可申上様も無御座、奉恐入の、如何様ニも可被仰付の所、以、」御憐愍、以來相慎可申旨被仰付之、冥加至極難有仕合奉存の、」依之御奉公差扣奉伺の旨申出之、伺之通被仰付旨申遣之、」

〔二七八四〕天明四年十一月六日

一御馬廻葛西縫右衛門儀、先達而る存寄之儀申上度旨、書付ヲ以「度々、御逢相願ハニ付、御逢も被仰付所、一向理非不相分儀」とも申上、御尋ホも被遊所、不都東成御答ホ申上、其後御沙「汰も不相待、又ハ書付ヲ以不埒之儀共申上、不届ニ付、遠慮被仰付、」

十二月五日御免、同日自分遠慮、伺之通、同七日御免、

〔二七八六〕天明六年七月十日

一淀ヶ關町奉行船水彦八、薩摩家中有川衛士御關所入ハ節、公義御役人と申上ハ、以來左様無之様、急度取扱ハ様、「先此度ハ承届ハ、以來右林之儀有之ハ而ハ、難相濟ハ、此旨申通ハ様、」同役野呂市郎左衛門江申遣之、同十三日遠慮伺之通、同十六日御免、

同年十二月六日

一御小性組野呂力次郎・外崎与藏・成田左助、去年江戸詰之節、御時「節柄、取續難儀と云々申、致不勤、不届ニ付、遠慮被仰付之、」

一御扶持方御藏奉行久慈新五兵衛・唐牛伊八郎、米屋共江波米過出有之、當時格段之御場合、不_レニ付、遠慮被仰付之、

同廿九日御免、自分遠慮伺申出之、御年始ニ付、格段之「御沙汰ヲ以、御用捨被仰付之、

〔二七八七〕天明七年正月廿二日

一御馬廻竹森又吉儀、於宇和野鷲打取ハ旨達、御聽、是迄被遊、高覧ハ儀も無之ニ付、御内々ニ而被遊、高覧ハ、併射打殺「生之儀ハ御停止ニハ得ハ、以來右林之儀無之様ニ、急度相心得ハ様、」此度之儀ハ御用捨被仰付旨申遣之、

同年四月廿三日

一御近習小性作事奉行兼役小笠原作内悴御手廻喜藏儀、旧_{〔前〕}須竹内四郎左衛門悴元吉、慮外之儀有之由ニ而打捨ニ致_{〔前〕}ハ段申「出、右子細御尋之処、喜藏江對シレ而之過言斗ニ無之、」上江對シ過言有之ニ付、討捨ハ旨申出ハ得共、始末一向難相分ハニ付、「再應御僉議被仰付所、上江對シ過言と申出ハ儀、左而已甚敷」申分ニも無之ハ所、討捨ハ段、思慮不行届致方ニ付、急度慎「被仰付之、

683

天明七年十一月三日 同十二日御免

一 御馬廻加代官黒瀧茂右衛門・代官神長太郎、御檢地願段々、御取扱ニ相成、必竟代官不吟味之取扱、不埒ニ付、遠慮被_レ仰付之、

御收納御取立之取中ニ付、別段御沙汰を以御免、自分遠慮伺申出之、不及遠慮、

684

〔七八八〕
天明八年八月四日 同廿三日御免

一 町奉行江申遣_レハ、先月廿六日夜五ツ時、別段御用之面々、廻リ先「鍛冶町上番所、戸を閉、行燈も無之、番人居合不申段、」甚緩怠之至、不届ニル、兎角町役共不取メ之勤方ニ相聞「得_レ、依之同町名主坂本久右衛門急度戸メ申付旨申遣之、」

685

同年八月廿日 同廿五日御免

一 御徒頭比良野助三郎、青森_ノ上磯邊見物願申立_レ而、西ノ濱邊迄罷越_レ段、相違、申立之筋と相違、不届ニ被_レ思召、遠慮被_レ仰付之、

686

〔七七六〕
安永五年四月廿日

一 竹内衛士殿_ノ御目付江口達ニ而被仰付_レ者、遠慮伺差出、以御用捨「不及遠慮旨被仰付_レ節、御請堅ニ而申上_レ様、」

但遠慮下斗被仰付_レ節ハ、右御請半切ニ而申上_レ様被仰付_レ、

687

〔七八九〕
寛政元年閏六月六日 同七日遠慮伺之通 同十一日御免

一 御馬役木立静馬・青沼半助・有海七大夫、當年 御献上御馬、「何レも毛卷_ハ不宜、不吟味之至ニ付、當時 公邊ニ而甚以「毛養_ハ御吟味有之旨ニ_レ間、當駒寄_ル、以來隨分毛卷」ハ入念致吟味、取入_レ様、急度可申付旨被仰付_レ、則當年」御登馬毛養不_レ宜部、別紙を以被仰付_レ間、以來右林之儀「無之様被仰付之、

688

寛政元年十一月廿三日

一 諸手物頭間宮求馬儀、先頃松前蝦夷騒擾ニ付、御加勢可被差出御沙汰ニ付、一番手被仰付、御軍用金並合之通り渡方被仰付_レ所、右渡方ニ付、當時支度難行届、増渡願申出之内、又々八両増渡方被仰付_レ所、右増渡被下置_レ

而茂、「町家拂殘ホ有之、及迷惑ニ[△]間、再應申出、際限も無之ニ付、「右書付難受取旨相返[△]處、何レニも一通り御家老中江差上具」[△]様申出之、御作法ニ相拘[△]儀、心得違ニ付、後來右林心得違」無之様可相動旨、御家老中被成御申、於御用人宅申渡之、」

一同役貴田孫大夫、右ニ付再應相談をも可致[△]處、不筋之儀勘弁」茂無之、差出[△]儀、不行届致方ニ付、以來右林無之様、右同斷」申渡之、

同廿四日遠慮伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、

右兩人呼上、切封之切紙差出[△]所、右返事半切ニ而、御手紙」致拜見[△]と申文言申來[△]ニ付、左之通、〔四三ウ〕

御自分儀、今晚御用之儀ニ付、別紙返事横ニ而被申越[△]得共、横之部ニ無之[△]間、認直シ被差越[△]様ニと存[△]ゆ、則別」紙返事令返却[△]ゆ、以上、

右之通、兩人銘々江相返[△]所、堅ニ而何達も御切紙致[△]拜見[△]ト、「認直シ參[△]ゆ事、

689 寛政元年八月十三日 九月三日御免

一御馬廻野呂矢柄、御樂屋加役勤中緩セ之勤方ニ付、遠慮被[△]仰付之、自分遠慮伺之通、三日目御免、

690 寛政二年四月廿六日 五月廿六日御免

一御馬廻加代官笹森權藏・栗原喜兵衛・黒瀧茂右衛門、代官神」長太郎、去秋御檢地之節、[△]生地申出高相違、不吟味ニ付、「遠慮被仰出之、

自分遠慮伺之通被仰付之、三日目御免、此節郡奉行[△]にて申渡、組頭江知セ申遣之、

691 同年六月九日 同廿八日御免

一御近習小性作事奉行兼役小笠原作内、去秋作事方支配鍛冶頭中村喜太郎姦曲之致方、必竟其方忽緒之勤方故、右林之儀有之、不届ニ付、遠慮被仰付之、

同廿九日自分遠慮、伺之通、三日目御免、〔四四オ〕

692 寛政二年七月九日

一作事奉行横嶋勝右衛門、右同斷遠慮被仰付之、同廿八日御免、「自分遠慮、伺之通、三日目御免、

693 同年八月十三日

一大納戸前田源次郎・長谷川源藏・吉岡徳藏、近來取扱向[△]等閑之儀有之、仕裁屋ホ申出[△]儀も、理非も不相糺、

694

寛政四年八月十六日 九月六日御免

〔朱〕
一 御手廻組頭高倉主計、御馬廻組頭渡邊將監・津軽外記・堀五郎左衛門・大道寺隼人、組取扱忽緒ニ付遠慮被仰付之、〔四四ウ〕右ニ付、御門四ヶ所預明有之ニ付、変之節 御紋形之臺挑灯」相用い様、右入用蠟燭明シ油之儀も、上より渡方被仰付い事、」

御小」納戸江申出、唯取次之様ニ相成い段、心得違之事ニい、以來急度」相心得、善悪ホ与得相糺シ、御用向取扱い様被仰付之、但此節出座無之、」

同十四日、右ニ付遠慮伺申出之、前田源次郎・長谷川源藏、」伺之通被仰付之、同十八日御免、

同十五日、吉岡徳藏申立い、遠慮伺ニ付、加勢可被仰付哉之旨、」伺申出之、前田源次郎・長谷川源藏、伺之通被仰付之、同十八日」御免、

同十五日、吉岡徳藏申立い、遠慮伺ニ付加勢可被仰付哉之旨、」伺申出之、是迄之通相動い様申遣之、

同十八日、吉岡徳藏遠慮伺之通被仰付之、同廿二日御免、」

695

寛政二年十月廿六日

一 御醫者小野秀庵・中村春庵・和田文良・松山道怡・菊池道坤・松本玄泰、醫術未熟故、自病家頼合も無之趣

相聞得、何運も累代之家業怠い儀、不埒之至ニい、依之急度申渡い様ニ被仰付之、

右ニ付遠慮伺之通被仰付之、十月十六日御免、
菊池道坤病氣ニ付、親類山口勝右衛門名代、願之通、

696

寛政三年三月廿九日

一 御手廻樋口八右衛門、青森湊目付勤中、石濱村仁八船御役錢」取立、目録ニ相見得不申いニ付、相尋い所、調落之旨申出之、格段之御取り合も被仰付い所、不念之取扱

ニ付、遠慮被仰付之、」
四月廿八日御免、自分遠慮伺之通、三日目御免、

一 右ニ付、青森在勤之御徒目付工藤形助、此末在勤御差留之上、」急度慎被仰付之、四月廿八日御免、

697

同年五月廿九日

一 掃除小人中村之源吉、家屋敷御取上被仰付い所、取荒い處、」慎申付旨申遣之、

一人親類、御留守居支配黒石常藏、罷越引渡由、申出
由ニ付、「慎申付旨申遣之、

但常藏ハ以下支配ル勘定人加勢之処、右加勢引取之

上、「慎御免被仰付之、

698 寛政三年十二月十六日

一御手廻平沢亀藏、御馬廻永田左十郎・今九郎兵衛、東長町

御藏勤中、駄下米并諸渡米廻シ共、吟味方不行届

之儀有之、遠慮被仰付之、

同廿五日御免、自分遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

699 同日

一御手廻高瀬直右衛門・成田新五左衛門、御馬廻佐藤茂左

衛門、青森」御藏勤中、不メニ付、遠慮被仰付之、

同廿五日御免、自分遠慮伺申出之、御用捨被仰付之、

700

〔七九二〕

寛政四年正月十四日 同廿一日御免

一去ル九日、監物殿出仕之節、下乗橋先張番足輕兩人共詰

所ニ「居不申旨相聞得、食議之所、大組足輕成田久太郎・

原田吉郎次、」右張番相勤由所、吉郎次儀病氣見継之内、

詰所明由ニ付、急度「慎申付置由旨申出之、承届由、

〔四五ウ〕

701 寛政四年二月廿四日

一御目見以上御留守居支配相馬忠八儀、御食議之筋有之ニ

付、「急度慎申付之、

閏二月九日慎御免、翌十日御取扱ニ相成由ニ付、遠慮伺

申出之、「不及遠慮旨被仰付之、

702 同年閏二月十六日

一御手廻米沢六郎大夫儀、前々難澁之儀数度申出、御取

扱ニ「相成由、然ハ一昨年一統極難、拝借米御差引方皆

捨被仰付、「以來拝借願決而不申出由様被仰付由ニ付、此

節御時合勘弁」致、一分之覚悟も可有之処、又々御取扱

之儀申出、甚不埒之」至由ニ付、御奉公遠慮被仰付之、

三月十六日御免、自分遠慮伺申出不及遠慮旨被仰付之、

一同十九日、右同人儀難儀ニ而及渴命由林ニ付、各様ニ而

見分之上」御申立被成由間、御沙汰之上、此度御米三俵

被下置由、然ハ同人」儀前々数度極難之申立ニ而、此

度ニ不限、御取扱ニ相成由」ニ付、為御メ合、御奉公遠

慮被仰付由、各様ニ而も、同人願之筋」数度ニ及由儀、

704 寛政五年四月廿日
(二七九三)

一御小性組山本三郎左衛門、御家中鎗術兼々被仰付ハ通、去ル六日」於評定所三組頭見分致ハ所、其方門弟罷出不申、御食議」被仰付ハ所、心得違之申出、不埒ニ付、御奉公遠慮被仰付之、」

703 寛政四年十一月廿六日

御取扱方可有御座ハ所、無其儀、一昨年」被仰付ハ趣、尚又御勘弁、以後ケ様之御取扱無之様、番頭」杯江も能々被仰含置ハ様、拙者共ハ得御意置ハ様、御家」老中ハ被仰付旨、右頭渡邊將監江口達書相渡、右ニ付」(四六才)將監并番頭兩人遠慮伺申出之、右伺ニ不及、書付相返之、」

一御馬廻神八郎右衛門儀、長町東御藏泊番之節、御藏戸前封印切シ、鏡前拔出ハ旨申出之、甚不メ之勤方ニ付、御奉公」遠慮被仰付之、

右ニ付、親庄左衛門ハ遠慮伺申出之、御用捨ヲ以不及遠慮旨」申遣之、

同十二月廿六日御免、翌廿七日自分遠慮伺申出之、遠慮不及旨」被仰付之、

705 寛政六年五月廿日
(二七九四)

但同日成田又之丞・加藤清九郎之門弟取扱罷有ハ所、右同」門弟不罷出ハニ付、御奉公遠慮被仰付之、五月朔日、十二日目ニ而御免、自分遠慮伺申出不及旨被仰付ハ、」

一大組組頭竹内源大夫申立ハ、去ル六日御組頭中射藝内覽之節、」私門弟在宅并風氣差合ニ而、老人も罷出不申ハニ付、(四六才)遠慮伺」之通被仰付之、尤御手廻館美亦市儀も右

同断、」

同廿六日七日目ニ而御免、

706 寛政元年十月廿五日 同卅日御免
(二七九)

一御城附警固小野傳右衛門・同並足輕小山内幸助・川口伴右衛門・花田半之助・」鳥井崎辰之助儀、御太鼓樽當番之処、御太鼓打違ニ付、」押込申付之、

707 寛政四年十一月廿七日
(二七九七)

一佐々木庄左衛門悻和内儀、御鷹野場所ニ而殺生致ハニ付、慎被仰付ハ、」

料

708

寛政五年七月十一日

一有海七大夫儀、御獻上并御配御馬之内、四足ニ痛ホ有之、御用ニ「不相成ハニ付、急度可被仰付ハ得共、以御憐愍、慎被仰付之、」

資

同廿五日御免、八月三日青沼半助・木立武右衛門、右之儀心も無之「不和合之趣相聞得、不埒之至ニ付、遠慮被仰付之、同九日御免、」

709

同年十二月廿三日

一足輕目付黒石源司儀、役筋忘却ニ付、當七月長柄之者役下「被仰付ハ所、當九月直ニ孫右衛門と致名改、足輕代目付申出之被」仰付ハ、然ハ役筋忘却と申、被仰渡乍存、代目付目論申出ハ儀、「甚心得違ニ付、足輕目付古役兩人慎被仰付ハ、」
〔四七六〕

710

寛政五年七月三日 同廿一日御免

一岡本形七儀、油川米留役相勤ハ砌、心得違之取扱ニ付、御奉公「遠慮被仰付之、」

711

同年七月十一日

一蟹田町奉行福士傳次郎儀、支配所隠下米致ハ節、心得違

之取扱有之ニ付、遠慮被仰付之、同廿日御免、

右五浦町奉行之類遠慮被仰付ハ節ハ、於宅申渡ハ先格ニハ得共、此度ハ手紙ニ而相濟之、

712

寛政七年七月廿三日 八月十日御免

一古平八右衛門、御手山方御用相勤ハ所、末木杣取之節、生木取受「杣取ニ付、遠慮被仰付之、」

713

同年十二月九日 同廿三日御免

一佐藤弥五右衛門儀、當秋流木流失之節、脊戸之内江隠木預置ハ「ニ付、遠慮被仰付之、」

714

寛政十二年十月廿九日

一御馬廻与力吉町弥右衛門儀、鏝ヶ沢江罷越ハ節、自分用事向「御用状ニ取繕、神忠太方江差出、甚心得違ニ付、遠慮被仰付之、」

715

寛政十一年四月八日

一御家中之面々不宜儀有之、御沙汰之上御奉公遠慮被仰付ハ而も、〔四七七〕「奉行以下之分ハ、御免之節、是迄不奉

伺は得共、以來御前伺之」 上御免被仰付は様被仰付之、

716 〔八〇三〕
享和二年十月十六日

一 御馬廻黒瀧長左衛門悴幸藏儀、不行跡ニ付、御中小性退
役被仰付、
一 親江御預、他出御差留被仰付ニ付、遠慮
之儀、竹内衛士殿江相伺は処、
一 皆御役被召放之ケ条ニ
而取扱は様被仰付は、
〔四八才〕

717 〔八〇三〕
享和三年三月十日

一 知行被召上、新ニ御扶持方并御切米被下置、何役江も被
仰付は部、親」類頭方遠慮之儀ハ、御役被召放之部ニ而
取扱は様、
一 親右同様ニ付、悴退役并御役下ニ而、悴退役之節、親類
頭方遠」慮之儀、御役下之部ニ而取扱は様、被仰付は、

718 享和三年十月十四日

一 川原平牢居、親類頭方永之御暇之部江二日増、
一 知行斗御減被仰付は、親類頭方押隠居之部ニ而取扱、
一 一間所江押込、親類見継被仰付は節、親類頭方疊居之部
江一日増、
〔

一 御暇之上親類江御預ケ一間所ハ、親類頭方永之御暇之部
江一日増、
〔

719 〔八〇四〕
享和四年二月五日

一 追放拾里以下遠慮日數之儀、永之御暇之部江一日増、十
里」以上ハ二日増ト被仰付は、
〔四八才〕

720 〔八〇四〕
文化元年十二月廿四日

一 一間官官藏御役下ニ付、本家間官助八從弟ニ相當り、遠慮
伺申」出之、桜庭半兵衛殿相伺は所、以御用捨不及遠慮
旨被仰付は、
一 分家本家ニ而數代ニ相成、其後養子ニ而參り、又々親族
ニ相成は部、
一 父子兄弟之外ハ、以御用捨不及遠慮と被
仰付は、
〔

721 〔八〇五〕
文化二年十一月十四日

一 於親江戸表出奔變死凡而之無調法ニ付、悴永之御暇并退
役」ホ之節、右悴之頭不及遠慮旨被仰付之、
〔

料 722 〔二八〇七〕
文化四年三月十七日

一親無調法ニ而忤退役之部ハ、遠慮之儀、御役下之部ニ而取扱被仰付」罷有也、然此度井上官藏儀、親無調法ニ而追放被仰付也ニ付、」親類頭方遠慮之儀ハ、永之御暇之部ニ而取扱可被仰付哉、」

但里數ニ不抱、

一井上左源司儀ニ付、親類頭方遠慮之儀ハ、先達而森内左兵衛川原」平江牢居被仰付也節之通、永之御暇之部江二日増ニ可被仰付哉、」

伺之通、但左源司儀、身上被召上、入牢被仰付也、

723 〔二八〇八〕
文化五年二月十七日

一御給分之内被召上、御役下被仰付也而も、御役下之部ニ而、親類・頭方」遠慮被仰付也、

724 文化五年八月廿二日

一社人無調法ニ付、親警居と被仰付也節、忤并親類之社人〔四八ウ〕
・社職慎ホ」申出也節、忤并親類之社人社職慎ホ申出也節、御家中」同様之取扱ニ被仰付也、

725 〔二八〇九〕
文化六年二月廿九日

一貴田十郎右衛門、養兄金清右衛門儀、半知被召上、隱居被仰付也ニ付、」遠慮伺之儀、是迄右林之伺不相見得也ニ付、伺也所、不遠慮及」と可被仰付也間、重而左様相心得也様、竹内衛士殿被仰付也、」

但実方ハ山形甚之丞方ニ而、金清右衛門方江養弟ニ参り、夫を」貴田江養子ニ参也、

726 〔二八一〇〕
文化七年九月七日

一表右筆見習葛西丈右衛門儀、於江戸表膝腫相煩也所、今以全快不」致、繁勤之席難儀之趣ニ付、勤料被差引、見習御免被仰付也、」

但右ニ付親宇兵衛を遠慮伺申出也得共、御沙汰之上、書付」御返シ被仰付也、

727 〔二八一〕
文化八年十月廿九日

一斬罪被仰付也節ハ、頭方ホ遠慮日數之儀、永之御暇之部江二日増、」御定ニ御用捨之部ハ御用捨、御定ニ無御座部ハ、不殘御用捨ヲ以」不及遠慮旨、被仰付罷有申也、

火罪 磔 獄門

〔二八三〕
文化九年七月二日

右御仕置被仰付の節、右之者之親類縁者、頭方ホ遠慮日
數之儀、永之御暇之部江二日増被仰付、御定ニ御用捨之
部ハ、三日ニ可被仰付哉、〔四九才〕
御用捨ヲ以、不及遠慮と可被仰付哉、奉」伺は所、
御用捨ヲ以不及遠慮部三日ニ被仰付、其外申出之通被
仰付は、」

一遠慮御定ケ条之内、子共並見習被仰付相勤、無調法御座
は而、」勤料被召上、親江御返被仰付、或ハ退役ホ被仰
付の節、親類頭方遠慮之儀、右両様共、御役被召放之
部之御定ニ御座は得共、跡式之」節、以上支配ニ可被仰
付面々、譬ハ勘定人并御徒御料理人ホ見」習被仰付相勤
居は故、右林御呵之節ハ、元來跡式之節被仰付は」御
役、下席見習相勤居はニ付、右之類ハ親并親類頭方其
外」御用捨之部も、不殘御用捨ニ御座は御例ニ付、取扱
來は得共、親子」御目見以上之面々、悴見習勤ホ不仕は
族ハ、跡式被下置は部ハ、」
御目見以上御留守居支配ニ被仰付は御儀と奉存は、然処
親並之分、」御役次第ハ下ニ御座は得共、以上支配方御

徒并勘定人ホニ御取立」被仰付は御儀も御座はニ付、家
督之節被仰付は御役、下席見」習相勤居は迎、無調法
御座は間、右様被仰付は節、親遠慮御用捨」よてハ、如
何之御儀と奉存は間、以來ハ親子」御目見以下之子共、
たとへ」御目見以下席見習相勤居は而も、右林御呵被仰
付は節ハ、親并親類」頭方共御定之通取扱可被仰付哉、
又ハ是迄之御形ヲ以、右林無調法」之節、親御用捨と被
仰付、其外之親類ハ不及遠慮と被仰付、御用」捨之部ハ
不及差出と可被仰付哉、」

御用所点羽、此ケ条ハ、以來子共之御役之高下ニ不相
抱、父兄共御」用捨之儀御止被仰付、御役被召放之ケ
条ニ付取扱は様、可被仰付は哉、」

一末子女子姉妹弟叔母叔父出奔ハ、其家之父兄遠慮三日、
或ハ御用捨ト」御定ニ御座はニ付、是迄右林之儀御座は
節ハ、御例僉議之上申上」來は而、遠慮被仰付は御例申
上は得ハ、遠慮被仰付、御用捨之処申上」は得ハ、御用
捨と可被仰付は御儀と奉存は、左は得ハ、同様之儀ニ而遠
慮被」仰付は儀も御座は、御用捨と被仰付は事も御座は
而、區々之御儀」と奉存は間、以來右両様之内、一方之
御定ニ可被仰付は哉、」

但御尋之御用中之族ハ、格別之事ニ御座ハ、

御用所点羽、此ケ条ハ、以來、其家之父兄以御用捨不

及遠慮旨」可被仰付哉、

一組支配不埒有之、頭方ハ申立之上、追放以上重キ御呵之節茂、

「頭方遠慮以御用捨不及遠慮と可被仰付哉、又ハ重キ御呵ニ付、

「三日遠慮可被仰付哉、」

但是迄頭方申立之上、永之御暇并御役下ハ被仰付ハ節ハ、御用捨」之部と御定ニ御座ハ得共、本文之重キ御呵之節ハ、何共無御座ハ、

御用所点羽、此ケ条頭方ハ不埒之儀申立之上、頭方以御用捨不及」遠慮旨可被仰付哉、

一重キ御呵之節、縁類ニ而遠慮伺差出ハ節、遠慮有無、是又御例」食議之上申上來ハ得共、早速之御間ニ合不申ハ間、以來大袿之儀」縁類ニ而遠慮伺差出ハ節、左之通可被仰付哉、

妻ノ兄弟 妻ノ甥 妻ノ叔父 妻祖父 伯母 姉妹

〔五〇才〕 婿 姪 孫 姪

右之通遠慮伺差出ハ様、右之外ハ差出ニ不及ハ様可被仰付哉、此段」奉伺ハ処、文化九年七月二日点羽之通被仰付旨被仰付之、

右ニ付、頭方ハ申立之上、追放以上重キ御呵之節茂、

「頭方遠慮以御用捨不及遠慮と可被仰付哉、又ハ重キ御呵ニ付、

「三日遠慮可被仰付哉、」

但是迄頭方申立之上、永之御暇并御役下ハ被仰付ハ節ハ、御用捨」之部と御定ニ御座ハ得共、本文之重キ御呵之節ハ、何共無御座ハ、

御用所点羽、此ケ条頭方ハ不埒之儀申立之上、頭方以御用捨不及」遠慮旨可被仰付哉、

一重キ御呵之節、縁類ニ而遠慮伺差出ハ節、遠慮有無、是又御例」食議之上申上來ハ得共、早速之御間ニ合不申ハ間、以來大袿之儀」縁類ニ而遠慮伺差出ハ節、左之通可被仰付哉、

729 〔七九九〕 寛政十一年正月廿九日

一御留守居組久保田貞吉、當年三歳、

右貞吉儀、幼年ニ而病死ニ付、御定法之通、跡式被召上

ハ、

右ニ付、頭并親類遠慮伺之儀、御定ケ条ニ無之ニ付、取扱如何可仕」ハ哉、奉伺ハ所、頭并諸親類共同差出ニ不

及旨被仰付ハ、尤御先格」宝曆四年閏二月廿六日、御留守居組進藤市五郎幼少ニ而病死ニ付、

御定法之通、跡式被召上ハ節、一統遠慮伺相見得不申ハニ付、其段」茂

申上ハ事、

730 〔七八一〕 文化八年八月

一直頭不居合、支配組預リ組ニ而、最初御不審之節ハ、御役下ケ」被仰付ハ節迄、取扱ハ得ハ、是又直頭同様、遠慮之事、

但御不審之節取扱有之ハ共、御役下ハ之節、直頭有之ハ得ハ、直頭」斗遠慮被仰付、支配組預リ組之頭ハ不

及遠慮、書付御返シ之事、

一御不審向取扱無之ハ而、御呵ハ被仰付ハハ、たとへ組支配御呵之前日、

其頭被仰付ハ共、遠慮之事、

一御留守居組久保田貞吉、當年三歳、

右貞吉儀、幼年ニ而病死ニ付、御定法之通、跡式被召上

ハ、

右ニ付、頭并親類遠慮伺之儀、御定ケ条ニ無之ニ付、取扱如何可仕」ハ哉、奉伺ハ所、頭并諸親類共同差出ニ不

及旨被仰付ハ、尤御先格」宝曆四年閏二月廿六日、御留守居組進藤市五郎幼少ニ而病死ニ付、御定法之通、跡式被召上ハ節、一統遠慮伺相見得不申ハニ付、其段」茂

一組支配御咎有之由共、先組之節之頭取扱ニ而、當頭之節御咎斗ニ有之由得ハ、當頭遠慮伺不及差出、先頭斗遠慮被仰付由事、

但當頭も先頭も御不審向取扱無之由ハ、當頭ハ遠慮被仰付、先頭ハ^{〔五〇ウ〕}以御用捨不及遠慮と被仰付由事、

一組支配無調法之儀、當頭江御不審有之、右御不審之趣、先^{〔三八三〕}頭勤中之事ニ由共、始終當頭之取扱ニ有之由得ハ、當頭斗遠慮^{〔三八三〕}之事、

731 文化十年三月十五日

一御手廻四番組山屋八五郎儀、御金藏勤中、無調法之儀ニ付、御留守居^{〔三八三〕}組江御役下被仰付、右頭大道寺宇左衛門殿遠慮伺可差出由所、去ル十^{〔三八三〕}一日御家老職被仰付由ニ付、右伺ニ不及旨被仰付由、

但御馬廻組頭之御手廻組頭ニ轉役之例ニ^{〔三八三〕}無之旨被仰付之、同組番頭老入ハ松前詰、老入ハ新役ニ付、書付不差出由、

732

安永五年四月廿日^{〔二七六ウ〕}

一竹内衛士之御目付江口達ニ而被仰付由ハ、遠慮伺差出、

以御用捨不及^{〔二七九ウ〕}遠慮旨被仰付由節、御請、堅ニ而申上由様、

但遠慮と斗被仰付由節ハ、右御請半切ニ而申上由様被仰付由、

733

寛政十年五月^{〔二七九ウ〕}

一笹森小大夫其外誓居之面々之嫡子、百日ツ、ニ而遠慮御免、被仰付由、

734

寛政十一年四月^{〔二七九ウ〕}

一小倉作左衛門・松田常藏誓居之節、嫡子十二日目ニ而御免被仰付由、

735

文化二年二月十三日^{〔二八〇ウ〕}

一七戸権右衛門誓居之節、嫡子十日目ニ而御免被仰付之、^{〔五一オ〕}

736

文化二年閏八月四日

一古川源吉性平作儀、無調法有之、御預之上他出差留被仰付、御^{〔二八ウ〕}取扱ニ罷成、入恐由ニ付、御奉公遠慮伺申出之、不及遠慮旨申遣之、

料 737 享和二年八月七日

一 悴上之遠慮慎被仰付の節、其父遠慮伺差出の筈、

右悴遠慮慎 御免被仰付、其後自分遠慮被仰付の節ハ、

資

父遠慮」之儀伺差出可申哉之儀、衛士殿江相伺の所、敢

初御用捨ヲ以不及」遠慮旨被仰付の間、重而差出ニ不及

旨被仰付之、」

738 寛政三年五月廿日

一 掃除小人江御役下被仰付の得ハ、」以來家屋敷御取上被仰

付旨、沙汰之通被仰付、

739 文化七年四月十七日

一 安藤七右衛門・松田富之丞、南隣境垣ハ出火ニ付、火元

相分不申の問、」右兩人ハ遠慮伺申出之、兩人共同之通

被仰付之、」 (五一才)

740 寛政三年十一月四日

一 今日老役者人江相渡の口達書、左之通、

無調法有之、御咎被仰付の節、親類ハ御奉公遠慮伺差出

の儀、」心得違之族も有之ニ付、以來左之通被仰付、

一 追放・阿房拂其外凡而重キ御仕置ホ被仰付の節ハ、其親

類忌懸リ并縁類不殘伺差出の儀、

一 永之御暇被下置、或ハ當年出奔・変死ニ而、家断絶ニ及

の類ハ、」其父子兄弟叔父甥従弟智舅祖父孫、其外分家

本家之儀ハ四代迄、差出の儀、

一 御役被召放、開門・逼塞・替居・変死ニ付御咎有之部

ハ、其父」子兄弟祖父孫伯叔父智舅従弟、其外分家本家

之儀ホ」大叔父再従弟迄、伺差出の儀、

一 押隠居御役下之部ハ、其父子兄弟、其外分家之儀ハ大叔

父」再従弟迄、伺差出の儀、

一 隠居之親出奔之節ハ、其子不殘伺差出の儀、

一 嫡子出奔之節ハ、其家之父兄弟父、并養子ハ実方之父兄

伺差出の儀、

一 末子女子姉妹弟叔父叔母出奔之節ハ、其家之父兄斗伺差

出の儀、

一 変死ホ有之節ハ、其父并兄弟叔父甥夫伺差出の儀、但同

斗、」

一 父母変死之節ハ、其子不殘伺差出の儀、

一 親無調法ニ而遠慮慎被仰付の節ハ、嫡子斗伺差出の儀、

- 一 忤無調法ニ而遠慮慎之節ハ、其親伺差出_レ儀、
- 一 九而嫡孫承祖_レる時_ハ、嫡子ニ準可申事、
- 一 組支配無調法有之、御咎被仰付_レ儀ハ、其直頭并兩組ハ番頭、「其外小頭_ハ伺差出_レ儀、
- 一 組支配大袿御咎有之_ハ共、先組之節之取扱ニ而、當頭取扱無_レ之_ハハ、右當頭伺ニ不及_レ事、
- 一 但先組之頭并兩組ハ番頭、其外小頭伺差出可申事、
- 一 支配組、預組ニ而右袿無調法有之_ハ共、伺ニ不及、乍然始終之_レ取扱有之節ハ、直頭同様、伺差出可申事、
- 一 組中不埒之儀有之、頭方ニ而申立之上、御役下_ハ被仰付_レハ、右頭_ハ伺差出可申事、
- 一 江戸勝手組支配右袿無調法有之_ハ共、於御元无其頭伺ニ不_レ及_レ事、伺頭方江戸詰之節、是又伺ニ不及_レ事、
- 一 失火并御咎被仰付_レ當人、遠慮伺差出_レ儀、是迄之通、
- 一 支配方御咎_ハ有之_ハ而も、右支配頭_ハ遠慮伺不差出_レ來_レ部_ハ、「是迄之通、
- 右之通、以來、心得違無之様被仰付_レ、
- 一 遠慮被仰付_レ節、幼少之子共、虫氣ニ而聲高之儀御聞届之儀、「是迄親類ヲ以申出_レ得_レ共、閉門・逼塞_ハ格、遠慮一通リニも、以來御届ニ不及_レ、」

〔五二ウ〕

〔三八〕 遠慮日数御定

741

重御仕置、縁類不殘御沙汰次第、

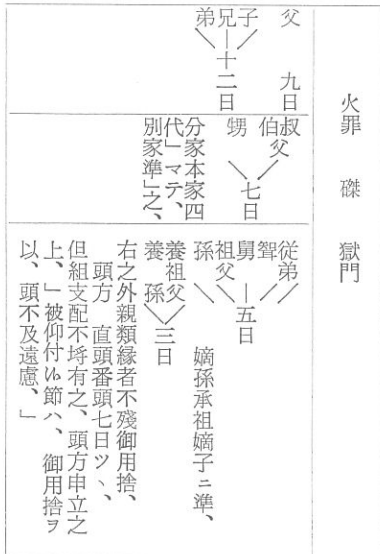
縁類遠慮差出_レ部

- 妻ノ兄弟 妻ノ甥 妻ノ叔父 妻ノ祖父
- 伯母舅 姉妹舅 姪舅 孫舅

〔五三オ〕

742

火罪 磔 獄門



〔五三ウ〕

| | | |
|--------------------------------------------------------------------------------------|--|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 斬罪 拾里以上追放 入牢 父一九日 伯叔父 七日 子 十二日 甥 ツ、 兄弟 十二日 甥 ツ、 追放十里以上日數之儀、永之「御暇之部江二日増、」 | | 從弟 〃 舅 〃 祖父 〃 孫 〃 養祖父 〃 養孫 〃 右之外親類縁者不殘御用捨、 頭方直頭番頭七日ツ、 但組支配不埒有之、頭方申立之上被仰付ハ、御用捨ヲ以、不及「遠慮、」 |
| 嫡孫承祖、 嫡子ニ準、 | | |

〔五四オ〕

| | | |
|-------------------------------------------------------------------------------|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 拾里以下追放 父一八日 伯叔父 六日 子 十一日 甥 〃 兄弟 十一日 甥 〃 追放十里以下遠慮日數之儀、永「御暇之部江一日増、」 | | 從弟 〃 舅 〃 祖父 〃 孫 〃 養祖父 〃 養孫 〃 右之外親類并縁者不殘御用捨、 頭方・直頭・番頭六日ツ、 但組支配不埒有之、頭方申立之上被仰付ハ、御用捨ヲ以、不及「遠慮、」 |
| 嫡孫承祖嫡子ニ準、 | | |

〔五四ウ〕

| | | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 永ノ御暇 親無調法ニ而悴追放但里數ニ不抱 當人出奔 変死ニテ家斷絶 父一七日 伯叔父 五日 子 十日 甥 ツ、 兄弟 十日 甥 ツ、 川原平牢居、親類 ・頭方遠慮、 永之御暇之部江二日増、御用捨之部ハ御用捨無之部也、御用捨ヲ以、不及「遠慮、」永之御暇之上、親類江御預ハ、一問所江、親類頭方、遠慮永之御暇之部江一日増、但御用捨無之部ハ、御用捨無之部也、不殘御用捨ヲ以、不及「遠慮、」組支配足輕、於江戸表出奔之節、於江爰元頭方、遠慮伺差出ニ不及、」 | | 從弟 〃 舅 〃 祖父 〃 孫 〃 養祖父 〃 養孫 〃 右之外親類縁者、遠慮伺不及差出、 頭方・直頭・番頭、五日ツ、 但組支配不埒有之、頭方申立之上、御役下御暇ハ之節ハ、御用捨ヲ以、頭不及遠慮、 |
| 嫡孫承祖嫡子ニ準、 | | |

〔五四オ〕

| | | |
|--------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>御役被召放 知行被召上新ニ御給分被下_ル部 閉門 逼塞 疊居 変死ニ付御咎之部</p> | <p>父一五日 兄一七日ツ、 弟一七日ツ、 祖父三日ツ、 孫 嫡孫承祖嫡子ニ準、 養祖父御用捨、 養孫 分家本家、大叔父再從弟迄、別家準之、 伯叔父、 男 御用捨、 從弟、 頭方・直頭・番頭、三日ツ、 但組支配不埒有之、頭方申立之上、御役下御暇ホ之節ハ、御用捨ヲ以、頭遠慮ニ不及、</p> | <p>一 悴不行跡ニ付、御中小性退役被仰付、親江御預、他出御差留」被仰付_ル節ハ、御役被召放之ケ条ニ而、取扱被仰付_ル、 一 悴無調法ニ而退役被仰付、或ハ見習席引取_ル被仰付_ル節、親類頭方遠慮之儀、御役被召放之部ニ而、取扱被仰付_ル、 〔五五ウ〕 一 御中小性見習山田儀兵衛悴斧八儀、五人扶持勤料被下置、人別ニ調役加勢之処、故障之儀有之ニ付、勤料被差引、加勢引取」被仰付_ル節、親類頭方遠慮之儀、御役被召放之部、 一 一間所江押込置、親類見継被仰付_ル部、親類頭方、疊居之部江」一日増、 一 知行被召上、新ニ御扶持方并御切米被下置、何役ニも被仰付_ル」族、親類頭方、遠慮之儀ハ、御役被召放之部ニ而、取扱被仰付_ル、</p> |
|--------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

| | | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>一 押隠居之上、他出差留、親類對面不致_ル様ニ被仰付_ル節、親」類頭方遠慮之儀、疊居之部ニ而取扱被仰付_ル、 一 社人無調法ニ付、親疊居_ル被仰付_ル節、悴并類類之社人・社職」慎_ル申出_ル節、御家中同様之取扱被仰付_ル、 〔五六オ〕</p> | <p>押隠居 御役下 親御役下ニ付悴退役 婦役 父一三日 但知行之内被召上 子一五日 家督之子ハ 十日 兄弟三日 分家本家、 大叔父再從弟迄、 頭方・直頭・番頭、三日ツ、 但組支配不埒有之、頭方申立之上、御役下御暇ホ之節ハ、御用捨ヲ以、不」及遠慮、</p> | <p>一 知行被召上、新ニ御扶持方并御切米被下、何役ニも被仰付、悴退役」并御役下ニ而、悴退役之節、親類頭方遠慮之儀、御役下之部ニ而」取扱被仰付_ル、 一 知行斗御減被仰付_ル節、親類頭方遠慮之儀、押隠居之」部ニ而取扱被仰付_ル、 一 御給分之内被召上、御役下被仰付_ル而も、御役下之部ニ而取扱」被仰付_ル、 一 當役有之外廉、手傳兼役加勢ホ之勤中之節、無調法</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

有之、「御咎被仰付^レ節、本役之頭、遠慮伺申出^レ而も、以來御用捨^ヲ以、「不及遠慮旨被仰付^レ、

但御用所^ル人差被仰付^レ部へ、以御用捨不及遠慮、
兩組より」御金奉行湊目付御藏立合并御藏奉行^ホ
へ、其役持^一内之勤勞ニ付、右之分へ是迄之通被
仰付旨、文化九年十一月十二日」被仰付^レ、

一御馬廻耆番組^ル新田奉行之取扱工藤仁右衛門儀、文
化九年十月」廿三日無調法之儀有之、勤料被召上、
御目見以下御留守居支配」被仰付^レニ付、

御馬廻二番組頭預り組沢与左衛門、御馬廻耆番組
番頭原子」弥太右衛門・佐藤平右衛門、仁右衛門
儀ニ付、遠慮伺申出之、以御用捨不及」遠慮旨被
仰付^レ、」

〔二八四〕
一文化十一年五月廿八日

日記役申出^レ、福士辰之進儀、隠居之上、親傳次郎
江御預^ケ被仰付^レ、」然へ御定書ニハ退役并引取被
仰付^レ得へ、御役被召放^レ之部ニ而」取扱來^レ得共、
近來右御例相見得^不申^レ間、如可取扱可被仰」付哉
之儀、性隠居被仰付^レ節、永之御暇被下置^レ御例^ヲ
以、「遠慮之沙汰致^レ様被仰付^レ、

〔五七才〕

出奔ニ付遠慮

隠居之親出奔并母出奔

家督ノ子 十日

其外ノ子 五日

嫡子出奔

父 五日

養子ハ實方ノ父兄御用捨

末子ノ
女子ノ
姉ノ
妹ノ
弟ノ
叔父ノ
叔母ノ
御用捨
其家ノ父兄

一八八

変死ニ付遠慮

父母変死

家督ノ子 五日

他名ヲ繼^レ子 三日

嫡孫承祖嫡子ニ準

同居之
叔父叔母
甥父叔母
兄弟妻
弟妻
沙汰御
第、」

一御組入并見習勤^ホニ而罷有^レ族、変死致^レ而も、右
変死之」族之頭・番頭・小頭、遠慮伺不差出^レ事、
一家來変死之節へ、主人遠慮伺差出不及事、

〔五七才〕

〔五八才〕

754

| | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 御役下被仰付當人遠慮 | 〔五八ウ〕 |
| 長袴以上 <small>右</small> 長袴以上江 | 熨斗目以上 <small>右</small> 熨斗目以上江 |
| 月並以上 <small>右</small> 月並以上江 | 御目見以上 <small>右</small> 御目見以上江 |
| 長袴以上 <small>右</small> 熨斗目以上江 | 熨斗目以上 <small>右</small> 月並以上江 |
| 月並以上 <small>右</small> 御目見以上江 | 二十日 |
| 長袴以上 <small>右</small> 月並以上江 | 熨斗目以上 <small>右</small> 御目見以上江 |
| 何役ニ不寄 | 御目見以上江御役下之分ハ |
| | 十日 |

〔五九オ〕

753

| | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|
| 失火ニ付遠慮 | |
| 居宅不残焼失 | 三十日 |
| | 輕キ失火 自三日至十日 |
| 〔一八〇〕 一文化七年四月十七日、安藤七右衛門・松田富之丞、西隣境垣より」出火ニ而、火元相分り不申ニ付、右兩人 <small>右</small> 遠慮伺申出之、兩人共」遠慮伺之通、五月朔日、十五日目ニテ御免、 | |

〔五八ウ〕

752

758

〔一七八〕
天明二年五月二日
一葛西勘助甥代官手代塩崎文兵衛、組拂ニ付、御奉公遠慮伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、

一八九

〔三九〕

町在之者御追放等之節
御家中遠慮

〔五九ウ〕

757

| | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| 遠慮 慎 | |
| 親無調法ニ而遠慮慎之節、嫡子斗親御免之節迄遠慮 忤無調法ニ而遠慮慎之節、親遠慮御沙汰次第 | |
| 〔一八二〕 一文化九年五月十七日、御中小性見習棟方山次郎忤直吉、御奉公」遠慮被仰付ルニ付、山次郎 <small>右</small> 遠慮伺之処、御用捨ヲ以、不及旨」被仰付之、 | |
| 〔一八〇〕 一文化七年十二月朔日、御手廻工藤貞藏儀、木作御藏勤中之」儀ニ付、親左左衛門 <small>〔采地〕</small> 御奉公遠慮被仰付ルニ付、親左左衛門 <small>右</small> 遠慮伺申出之、御用捨ヲ以、不及遠慮旨被仰付之、 | |

756

755

料

759

天明六年四月朔日 同七日御免

一 齋藤八郎左衛門弟伊勢屋庄兵衛、弘前拂ニ付、御奉公遠慮」伺之通、

同二日

資

同二日

一 佐々木刑部左衛門從弟伊勢屋庄兵衛、弘前拂ニ付、御奉公遠慮」伺申出之、不及遠慮旨被仰付之、

760

同年十一月廿七日 十二月二日御免

一 三浦万右衛門、実方之兄悞元新田浅井村庄屋長右衛門、入牢」ニ付、御奉公遠慮伺之通、

同年十一月廿八日 十二月三日御免

一 戸八郎次、実方之伯父、悞元新田浅井村庄屋長右衛門、入牢」ニ付、御奉公遠慮伺之通、

天明六年十一月廿九日 十二月四日御免

一 三浦久次郎、叔父浅井村長右衛門儀ニ付、右同断、

761

寛政五年三月朔日

一 長谷川茂兵衛儀、從弟青森町佐藤理左衛門、追放被仰付ニ付、」遠慮伺申出之、不及遠慮旨申遣之、

〔四〇〕 出座定

762

宝曆五年八月二日

覺

一 於御用人宅、御用申渡之節、大目付出座之儀、前々御定有之、差圖次第、致出座相濟得共、御用人心得之儀、〔六〇ウ〕左之通、

一 熨斗目以上之面々申渡之節、大目付出座可致事、

一 熨斗目以下御馬廻迄、御呵重キ分ハ、大目付出座可申付事、輕キ分ハ御目付出座可申付事、

一 伺之上、御奉公遠慮被仰付、遠慮御免申渡之節ハ、只今迄之通、長柄奉行以上、大目付出座之事、

763

宝曆十二年八月十一日

一 大目付役御免、御留守居組被仰付旨、於御用人宅、申渡之節、

右之類、是迄大目付斗出座致得共、此度御目付も出座致セ」ハ様ニ、御家老中る被仰付之、

但此節田村源太兵衛、右之通被仰付ル節なり、〔六一才〕

『要記秘鑑』凶事の部は以上をもつて完結する。

『三十四』に対応する弘前市立弘前図書館所蔵の『御用格』

は、第一編の第二二 凶之部(御印物・印判 御出之節間違

御家老御用人江無礼 御献上・日之丸 御進物 諸御礼・披露

違・着服違 御名代・御召物 御台所廻 諸断・通用・御請

刀・翰走・慮外 認違・遅滞・不吟味・不心附・心得違・御書

物 誓詞・御飛脚・登 御藏・御鍵・湊・順違・目論違 田

方・山方・屋敷・夜廻・養子 諸渡物・押物・御用達 組支

配 変・鐘・失物・咎人・盜賊・御預・遠慮・闕所・評定所

遠慮・慎・御呵)であり、第二編は卷二二上 凶事(窺遠慮)、

卷二二下 凶事(出座定・遠慮御定 御目見以上遠慮慎御呵

御馬役師範家遠慮慎御呵 父母へ二三男等之義ニ付遠慮慎御呵

絵師之類御医者御役者諸職人遠慮慎御呵)である。なお第三

編は凶事以下を欠くが、第四編は卷二一 凶事(被仰出附詮儀

贅居 盜賊召捕 閉門・逼塞入記事なし) 御役下 遠慮諸

事 御預 追放附送返 町払鞭刑 御暇 儀絶・勘当・和談

一間所・他出差留・声高 咎人御国下 入牢出牢 御仕置)、

卷二二上 凶事(遠慮 慎 御呵押込 町在之者追放ニ付御家

中遠慮入記事なし) 出座定入記事なし) 町役在役浦々凡而

町在之者御呵 附黒石家中浪人共) 卷二二下 凶事(伺遠

慮)である(弘前市立弘前図書館『弘前図書館蔵 津軽家文書
総目録』昭和五九年 一四〇―一七頁)。

『三十三』と『三十四』は明らかに内容を異にし、『三十三』
が行刑全般を対象とするのに対し、『三十四』はもっぱら遠慮
・謹慎・閉門・御呵といった家中の武士すなわち藩士およびこ
れに準ずる家中の者を直接の対象とする事例である。したがっ
て前者を補うものとして、後者を位置付けておく必要がある。
つぎに各項目で取上げられた事例の年代を確かめておこう。

- ほぼ年代順に記載されている。まず『三十三』では、
- 一 天和二年(一六八二) 〓天明元年(一七八一) 一〇件
 - 二 天明元年(一七八一) 〓文化八年(一八一二) 一三件
 - 三 天和二年(一六八二) 〓文化八年(一八一二) 一八件
 - 四 享保十八年(一七三三) 〓文化十年(一八一三) 一九件
 - 五 正徳五年(一七一五) 〓文化八年(一八一二) 二二件
 - 六 寛文十年(一六七〇) 〓安永九年(一七八〇) 三四件
 - 七 元禄十二年(一六九九) 〓文化八年(一八一二) 四〇件
 - 八 宝暦六年(一七五六) 〓文化七年(一八一〇) 二〇件
 - 九 明和七年(一七七〇) 〓文化六年(一八〇九) 三一件
 - 一〇 文化七年(一八一〇) 一件
 - 一一 宝暦七年(一七五七) 〓文化十二年(一八一五) 七件

| 料 | | 資 | |
|----|------------------------|----|-----------------------|
| 一 | 宝永四年(一七〇七) 文化十年(一八一三) | 一 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 二 | 明和元年(一七六四) 文化十一年(一八一四) | 二 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 三 | 文化十年(一八一三) | 三 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 四 | 文化十年(一八一三) | 四 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 五 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) | 五 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 六 | 文化六年(一八〇九) | 六 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 七 | 文化八年(一八一) | 七 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 八 | 寛文七年(一六六七) 文化十年(一八一三) | 八 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 九 | 文化八年(一八一) | 九 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 一〇 | 宝永二年(一七〇五) 文化九年(一八一) | 一〇 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 一一 | 享保五年(一七二〇) 寛政六年(一七九四) | 一一 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 一二 | 宝曆十三年(一七六三) 文化十年(一八一三) | 一二 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 一三 | 安永七年(一七七八) 文化元年(一八〇四) | 一三 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 一四 | 安永四年(一七七五) 寛政四年(一七九二) | 一四 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 一五 | 宝曆八年(一七五八) 文化九年(一八一) | 一五 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 一六 | 延享二年(一七四五) 寛政二年(一七九〇) | 一六 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 一七 | 宝曆十年(一七六〇) 文化六年(一八〇九) | 一七 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 一八 | 寛延元年(一七四八) 文化十年(一八〇四) | 一八 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 一九 | 延享元年(一七四四) 寛政元年(一七八九) | 一九 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |
| 二〇 | 享和二年(一七一七) 寛政十一年(一七九九) | 二〇 | 寛政九年(一七九七) 文化九年(一八一二) |

〇〇〇〇『三十四』では、

| | | |
|----|------------------------|------|
| 三一 | 寛延二年(一七四九) 文化六年(一八〇九) | 二〇件 |
| 三二 | 延享元年(一七四四) 文化四年(一八〇七) | 二九件 |
| 三三 | 安永二年(一七七三) 寛政九年(一七九〇) | 七件 |
| 三四 | 安永二年(一七七三) 天明六年(一七八六) | 七件 |
| 三五 | 天明二年(一七八二) 寛政十三年(一八〇二) | 一四件 |
| 三六 | 延享元年(一七四四) 寛政十二年(一八〇〇) | 二七件 |
| 三七 | 元文三年(一七三八) 文化十年(一八一三) | 一〇五件 |
| 三八 | 文化十一年(一八一四) | 一七件 |
| 三九 | 天明二年(一七八二) 寛政五年(一七九三) | 四件 |
| 四〇 | 宝曆五年(一七五五) 宝曆十二年(一七六二) | 二件 |

となる。目付のもっとも新しいのは、一の215文化十一年五月二日条の追記で、文化十二年四月八日付である。弘前市立図書館所蔵の『御用格』はすでに述べたように第一編(寛政本)、第二編(寛政三年~文政七年)、第三編(文政八年~弘化四年)、第四編(嘉永元年~安政六年)であり、本書の執筆に際し、現在編綴されている形での『御用格』を利用したとは考えにくい。逐次綴り加えられた文化年代までのそれが利用されたのだろう。

〔訂正〕 (十一) 第二十一号 一八八頁下段一五行目

一七九〇↓一七六〇